

朝鮮の過去をめぐる政治学

——朝鮮半島における日本植民地考古学の遺産

斐原貞朗 訳
藤原炯逸 訳

一 韓国における歴史編纂と考古学史の政治性

過去百年間の朝鮮半島の歴史を整理するなら、次のようになるだろう。半島の宗主権と領土が、まず、外国の侵略者、すなわち日本に奪われた。この地は、植民地国家として日本の支配下となるが、その後、アメリカ合衆国とソビエト連邦により解放される。しかし、朝鮮戦争を経て、南北に分割される運命となる。引き続き社会的かつ政治的な動乱は、朝鮮文明の歩みのみならず、朝鮮の学者たちの知的環境にも影響を与えずにはいかなかった。実際、脱植民地時代、学界は、民族主義的歴史学派「民族史学」(민족사학 minjok sahak) に支配されてきた。朝鮮古代史の専門家で構成されるこの学派の代表は、李丙燾(이병도 Yi Pyong-do)、金載元(김재원 Kim Chae-won)、李基白(이기백 Yi Ki-baek)、金元龍(김원룡

Kim Won-lyong)、金哲峻(김필준 Kim Chol-jun)、千寛宇(천완우 Ch'on Kwan-u)、金貞培(김정배 Kim Chong-bae)である。考古学、古代史、そして美術史の重鎮として、彼らは、「朝鮮の(Korean)」アイデンティティの起源を証明すべく、遺跡やモニュメントを発掘し、そこから出た物的証拠とその「科学的」説明とを与えてきた。彼らの民族主義的な理解によれば、朝鮮史は、ひとつの連続した国家的闘争(鬪争史 투쟁사 tuch'aengsa)として記述しうるのだという。そうした史観のもと、外国の侵略者との戦争が、朝鮮史の主要な分岐点として選択された。隋(六一二年)と唐(六四五年)などの中国の王朝や契丹、女真などの遊牧民勢力、さらには、モンゴル(一二三二—一二七三年)や日本の豊臣秀吉(一五九二—一五九七年)との戦争が特筆されるのである。加えて、朝鮮の軍隊や叛乱軍を統率した武将が、朝鮮国民を外国への隷属から救

った文化的英雄とみなされるようになった²⁾。先の学者たちによれば、朝鮮の国民的戦争と独立精神「朝鮮主義」(조선주의 Choson chui)、「朝鮮精神」(조선정신 Choson chongsin)の歴史は、数百年来、伝統的に王統主義者であった歴史編纂者たちの中国鼻^{びいき}、すなわち「事大(사대 sadae)」(「大國への」隷屬意識)の態度によって、隠蔽され続けてきたという。さらに、彼らは、三十五年間の日本による植民地史の強制によって、朝鮮の人々が己の歴史と民族的アイデンティティを奪われたことも、歴史編纂が進展しなかった原因として強調した³⁾。

朝鮮戦争が終結し、こうした愛国主義的な歴史家が、大韓民国の学生と国民の文化と歴史の教育方針を指導する責任を負うことになった。学校教育ではあらゆる局面において、彼らの教科書が採用され、太古の時代以来、朝鮮の独立のために戦った英雄や殉死者の勇気を称える国史や国文学を教授する重要性が強調された⁴⁾。彼らはまた、文化財管理のための各種委員会「文化財管理局」(문화재관리국 munhwajae kwalliguk)にも参加し、国民的な独立戦争や紛争の場となった遺跡を選定する作業や、国家の象徴として保存し、復元し、称揚すべき建造物や城址、寺刹^{じしやく}の選定にも加わった。さらに、こうした委員会では、国家の休日として指定すべき記念日も決定された。例えば、朝鮮の建国記念日である「開天節(개천절 Kaecheon-jol)」やハングルの語の記念日(「ハングルの日(한글날 Hangul-

날)」などで、前者は紀元前二三三三年一〇月三日、後者は一四四六年一〇月九日と、それぞれ決められたのである。

歴史家によって推進された民族主義的プログラムは、武力や大統領選挙の不正操作によって権力の座に就いた軍事政権によって強く持ち上げられてきた。朴正熙(박정희 Park Chung-hee, 一九六一—一九七九年)、全斗煥(전두환 Chon Du-hwan, 一九八〇—一九八八年)、盧泰愚(노태우 No Tae-woo, 一九八八—一九九三年)ら、歴代の大統領たちは、継続的に独裁体制を維持し、その在任期間には、総計で三十年間も続いた。こうした支配者たちは、自らの政治的威光と正統性を誇張すべく、政府のみならず、教育、メディア、そして文化政策を自由に操作したのであった。また、反共産主義と反帝国主義の国家イデオロギーを掲げる軍事体制を推進することで、国家の団結を捏造してみせたりした。さらに、多くの人々にとって、まだ記憶に新しいことだろうが、朝鮮戦争の瓦礫^{がれき}から復興した韓国の奇跡的な経済成長は、国民のプライドを高め、共通の歴史的使命の意識を高揚するのに貢献することになった。

このように、歴史教育や文化政策、さらには独裁政権下の政策や急速な経済発展の影響を受けて、大韓民国は、二〇世紀に国民のアイデンティティとその団結心を形成したのである。朝鮮の国民的アイデンティティの柱は、単一(단일 taniil)かつ純粋な朝鮮民族が先史時代から存在し、その民族が、平壤(평양 P'yongyang)を中

心に、中国北東部の吉林(길림 Gilin-jim) ならに朝鮮半島北部に勢力範囲をもつ「古朝鮮(고조선 Kochoson)」の領土を統一支配してきたという前提によって成り立っている。⁽⁸⁾ この神話的な「朝鮮」民族の創始物語の中心となったのが、一三世紀に記録された『三國遺事(삼국유사 Sanguk Yusa)』である。⁽⁹⁾ その中で、天子「桓雄(환웅 Hwanung)」と「熊女(호녀 Ungnyo)」の間に生まれた「檀君(단군 Tangun)」の伝説が語られているのであるが、この朝鮮建国の父(부친 Kusin)たる「檀君」生誕が、紀元前二三三三年に起こった奇跡であると算出されることになる。⁽¹⁰⁾ つまり、朝鮮文明の起源は、日本の建国に先立ち、さらには古代中国の始原にも迫る時期にまで溯って設定されたのである。その結果、朝鮮の文化遺産と国家の歴史は、「古朝鮮」建国者の「檀君」生誕の日に溯って、「五千年の歴史」を有すると今日でも一般的に記述されるに至っている。⁽¹¹⁾

「檀君」の生誕は、単なる伝説ではなく、朝鮮民主主義人民共和国と中華人民共和国の境界に位置する朝鮮で最も高い白頭山(백두산 Paektusan)の山頂で起こったこととされている。伝統的に、朝鮮の国土において最も神聖な山とみなされている白頭山は、仏教と道教の信仰に深く関わる山でもある。また、この山は、北朝鮮の国家イデオロギーである「主体(주체 chuch'e)」(独立と団結)を表象する聖なる象徴としても特権化されてきた。革命的共産主義者たち

の伝承によれば、「偉大なる指導者」たる金日成(김일성 Kim Il-song)が、この山の頂上から、反日抗戦の烽火を揚げたとされているからである。⁽¹²⁾ 一九八〇年代、この山は、「親愛なる指導者」金正日(김정일 Kim Chong-il)が生誕した「聖地」としてさらに神聖化され、その山奥に、木造の建物が建立された。このように白頭山は、北朝鮮において、きわめて重要な役割を与えられ、マルクス主義思想にも、そしていかなる共産主義国にも存在しない「伝統的王国」の血統継承システムを正当化してきたのであった。かくして、現在、朝鮮の人々の聖なる故郷として、白頭山は、北朝鮮最大の観光地となっている。

「檀君」による国家救済神話を創出したのは、「大倥教(대종교 Taechong-gyo)」という宗教である。この信者たちは、日本の侵略から朝鮮民族を解放する未来の救世主として「檀君」を崇拜したのである。この宗教が創始されたのは一九〇五年、すなわち、朝鮮が日本の保護国となった年のことで、創始者は、羅喆(나철 Nacho)という反日革命派のカリスマ的指導者であった。⁽¹³⁾ 今日、朝鮮の歴史家は、この宗教と、反日運動の指導的立場にあった知識人、申采浩(신채호 Sin Chae-ho)や崔南善(최남선 Choe Nam-son)らとの間に、知的な繋がりを見出している。「朝鮮史編纂の父」として尊敬された彼らが、一九三〇年代に、「独立」「統一」朝鮮国家の民族的起源を古代神話に求める理論をはじめて提唱したからで

ある¹¹⁾。日本の植民地支配下であって、朝鮮の政治的独立を求めた国民主義的な知識人の思いが、歴史理論に反映し、「檀君」の神々と英雄が支配した「栄光の」時代に、すでに古代朝鮮の神聖なる領土が確定していたという思想が形成されたのである¹²⁾。民族主義的歴史学派に属する研究者たちは、自分たちが朝鮮の新たな民族史を「再発見」したのだと確信していた¹³⁾。その民族史は、「檀君」の「古朝鮮」に起源をもち、国家の独立心と闘争心を共有する血筋のなかに刻み込まれてきたものなのであった¹⁴⁾。

このように、二〇世紀初頭以来、朝鮮の歴史家たちは、外国に依存しない固有の朝鮮文明の太古性、および民族の文化的な優越性とその発展性を主張することを政治的な最重要課題としてきた。

そして、朝鮮の「歴史的独立」を立証しようとするあまり、彼ら歴史家たちは、日本の植民地時代に行われた考古学・歴史研究を、朝鮮から文化財や美術品を略奪した学術レベルでの「帝国主義的」陰謀（日帝御用学者 일제어용학자 ilche oyong hakja）とみなして、全否定したのであった¹⁵⁾。しかしながら、その熱烈な反植民地主義的な調子とは裏腹に、民族的純粹性を謳う現代朝鮮の民族史の枠組み、民族的特質の恒常性、そして国家の歴史的運命など、それぞれの考え方は、じつは、二〇世紀初頭の日本植民地のイデオロギーにも、すでに刻み込まれていたものであった。植民地時代以後の朝鮮の歴史家や考古学者の考え方のなかに、一九一〇年の「併合」時に、日

本人が「朝鮮人研究」において表明した植民地主義的な民族差別観の基本的枠組みが、内在化されているように思えるのである¹⁶⁾。とりわけ重大なことに、朝鮮の学者たちは、満洲国に極東民族の起源を求める植民地時代の民族学説を支持しているが、しかし、黒龍江や朝鮮北部に住む原住民に「プリミティブな」起源を認める仮説の根本に、民族的かつ植民地主義的な偏見が横たわっていることを全く理解してはいない¹⁷⁾。この民族理論は、「東洋学」の開拓者である白鳥庫吉、鳥居龍蔵¹⁸⁾、そして関野貞によってはじめて提唱されたものである。彼らは、民族誌学、考古学、美術史という移入されたばかりの西洋の学問を、朝鮮半島に応用した最初の研究者であり、その歴史的かつ民族的な研究を、朝鮮併合の口実として利用したばかりか、日本の中国侵略を正当化するためにも利用したのであった¹⁹⁾。

朝鮮の民族主義的な歴史編纂において基盤となった学問的遺産は、このように、一九世紀末期に形成されたものであり、北東アジアを侵略した大日本帝国による植民地主義の遺産の申し子であることを十分に理解しなければならないだろう。世紀の変わり目、パイオニアとなった日本の植民地学者たちは、あらゆる学問分野において、実地研究を行い、その成果を残していった。その範囲は、宗教や音楽、風俗、地理、社会学、心理学、農業、漁業、財政学にまで及んでいる。東アジアの歴史家や考古学者にはすでに周知のことであるが、こうした学問分野のなかで、調査の性質と正確さ、そして出版

の豊富さの点で、最も成果を挙げた分野が、「朝鮮総督府」と「朝鮮古蹟研究会」によって推進された考古学・文化財研究であった。

二 軍人、学者、官僚

—— 植民地時代の朝鮮考古学調査
(一九〇五—一九四五)

一九世紀末期、「朝鮮」政府は、三国時代(四—七世紀)⁽²⁾や高麗(고려 Koryo)王朝以前(九一八—一三八八年)の遺跡に全く関心を示さず、「両班(양반 Yangban)」の祖先崇拜儀礼に関わる埋葬塚の保存に多少の関心を寄せる程度であった。⁽³⁾朝鮮総督府博物館の元館長で、京城(ソウル) (경성 Seoul) 帝国大学の教授となった藤田亮策は、この無関心の背景に、李朝(이조 Yi dynasty)における儒学者たちの文書優先の態度があると考えていた。⁽⁴⁾実際、儒学者は、塔や石碑、仏像に刻まれた銘文を研究する「実学」の伝統に従っていた。優秀な「実学(실학 Sillhak)」学者ですら、先史時代の石器は、落雷によるものであり、人間の手ではなく、自然が作り出したものだと言張るありさまであった。それゆえ、日本人学者が来朝する以前の朝鮮半島には、考古学や民族誌学として今日知られている学問は、存在していなかったといわねばならない。朝鮮を訪れた日本の考古学者たちは、異口同音に、こうした遺物や遺跡に対する過去の王朝の無関心を糾弾し、すでに貴重な建造物が多数、失われてしまったことを嘆いた。⁽⁵⁾

新たに組織化された明治政府が、李王家と初めて外交関係を結んだのは、一八七六年の江華条約によってである。日本の知識人や学者たちは、次第に、東アジアにおける日本の役割の変化を理解し、朝鮮半島に目を向けるようになった。一八九四—一八九五年の日清戦争の後、彼らは、朝鮮半島を大日本帝国とその過去における重要な一部と認識し、研究を開始する。⁽⁶⁾一九世紀末から二〇世紀初頭にかけての草創期、「朝鮮」研究の先鞭をつけたのは、白鳥庫吉と鳥居龍藏(23)である。二人は、扶餘(부여 Puyo)や高句麗(고구려 Koguryo)における部族や、檀君、箕子(기자 Kija)、衛滿(위만 Wiman)といった「朝鮮」の伝説、さらには、漢の領土として中国の古文書に記載された楽浪(낙랑 Nakrang)についてなど、多様な問題を主題として論考を残している。⁽⁷⁾また、日本が、満洲や中国など、大陸への領土拡大の野望を膨らませるにしがって、朝鮮の研究は、いわゆる「満鮮史」研究に代表されるように、満洲の歴史や地理の研究とともに総合的に行われることもあった。

一九一一年、朝鮮の歴史史料を集める作業の一環として、鳥居は、人類学と先史学の調査を指揮する任務に就き、予定されていた教科書編纂のための史料を収集した。彼は、一九一一年から一九一五年にかけて、三ヶ月ごとに朝鮮に赴き、広範な調査を遂行する。朝鮮半島全土に及んで、写真撮影とスケッチを行い、考古学的かつ民族誌学的な資料を収集したのである(調査範囲は、現在の中華人民共和

国の吉林地方にも及んだ。豊富な政府の財政援助を得て、彼ら初期の学者たちは、未踏の地を訪れる場合と同じく、悪名高き憲兵隊を同行して調査を行った。また、鳥居は、ロバに荷馬車を牽かせて、輸送道路も鉄道もない地を踏査したことで名を馳せ、民族誌学的資料や歴史史料を求めて、満洲とモンゴル、さらにはシベリアにまで足を延ばした。資料収集の一方で、鳥居は、満洲と朝鮮にある多数の先史遺跡と遺物を確認し、石器が新石器時代に使用された道具であることを初めて証明したのであった。

鳥居の仕事を引き継いだのは、今西龍と黒板勝美であり、二人は、三国時代(삼국시대) 四―七世紀)に溯る最初の要塞と古墳(고분 kofun)を突き止めた。彼らの発見により、新羅(신라 Silla)、高句麗、百濟(백제 Paekche)、そして楽浪の陵墓の存在が確認されたのである。二人は、創刊したばかりの『史学雑誌』や『人類学雑誌』に論文を発表した。前者は、東京帝国大学、後者は東京人類学会が発行する雑誌であった。このように、朝鮮の史料研究と考古学調査を組織的に開始したのは、一九世紀末期の東京帝国大学の学者たちであった。

一八八四年(明治十七)創立の東京帝国大学人類学会が、始めて朝鮮に派遣した考古学者は、八木奘三郎である(一九〇〇年)。彼は、石器時代の遺跡ではなく、ドルメン(巨石墓)と三国時代の墳墓を踏査した。保護国条約締結の三年前にあたる一九〇二年には、

すでに、関野貞が、慶州(개성 Kyongsu)やソウル、あるいは開城(개성 Kaesong)など主要都市にある寺や宮、門や社を調査していた。東京帝国大学工科大学造家学科の学者で、一級の技師にして、歴史家、芸術家、建築家であった関野が、東アジア美術史と建築史に及ぼした影響は計り知れない。彼は単独で調査を行い、しかも、一九〇二年の踏査はわずか二ヶ月間であったにも拘らず、非常に豊かな成果をもたらした。調査の後に彼が起草した報告書は、朝鮮建築史と美術史の嚆矢となった。また、彼が多数の遺跡で撮影した写真は、一九世紀の遺跡の姿をそのまま留めるものであり、今日、かけがえのない資料となっている。彼の調査の後、朝鮮本土で繰り広げられた度重なる戦争によって、無数の建造物が破壊され、失われてしまったからである。

考古学調査と発掘を兼ねた最初の組織的なフィールドワークが、関野の指導のもとに遂行されたのは、一九一〇年、すなわち朝鮮が併合された年のことである。朝鮮半島の各地方に存在する古代建築モニュメントを調査したのは、谷井濟一と栗山俊一であった。この学術調査は、総督府による地籍調査と連動するものであった。日本による占領に伴い、総督府は日本人技師を派遣して、土地利用や交通網、鉄道、衛生工事、下水工事、採掘の調査を行ったのである。こうして、かつての王国の主要都市である平壤(高句麗)、開城(개성 Kaesong)(高麗)、慶州(新羅)、扶餘(百濟)が調査された。



図2 慶尚南道昌寧の石塔 (朝鮮総督府編『朝鮮古蹟図譜』第4巻 1916年刊より)

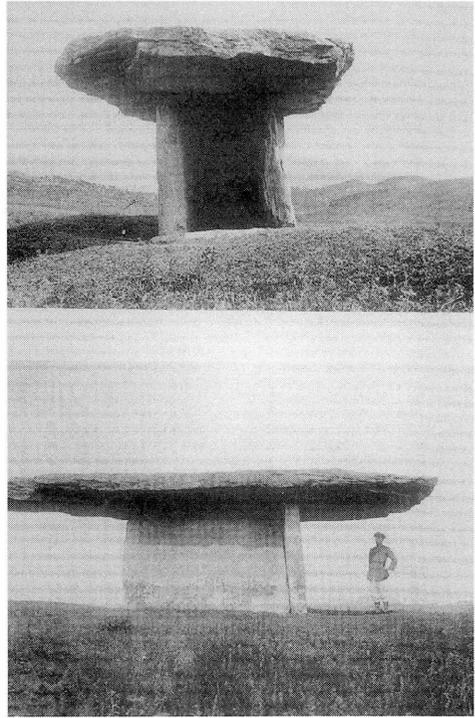


図1 黄海道ウンウル郡のドルメン (朝鮮総督府編『朝鮮古蹟図譜』第2巻 1915年刊より)

関野、谷井、そして栗山の三人の考古学者は、七年に亘って、先史遺跡や古代遺跡、そして古代の文物や建造物を写真撮影して記録し、時代やジャンル別に分類を行った。芸術的かつ歴史的価値の観点とその保存状況に応じて、重要な建造物やモニュメントを甲乙丙丁の四段階^④に分類したのである。分類の対象となった建造物の中には、塔、石碑、仏像、宮、城、漢の土城なども含まれていた。つまり、このとき、漢、新羅、百濟、高句麗、伽耶(가야 Kaya)の遺跡が初めて調査の対象となり確認されたのであった。ここに至り、考古学遺跡は、朝鮮の歴史的知識を修正し、充実させる材料となったのである。また、この調査プログラムでは、古い寺院の保存と修復も考慮に入れられていた。

一九〇八年、昌慶宮(창경궁 Ch'anggyong-gung)に動植物園と博物館が設置され、総督府が購入した新羅や百濟、任那(임나 ^⑤Imna)の文物が展示されることになった。その七年後、景福宮殿(경복궁전 Kyongbok-gung-jeon)の敷地内に朝鮮総督府博物館^⑥が開設され、彫刻や美術品、仏教遺物が展示された。博物館には、植民地時代に行われた調査で発掘された史料や当時のコレクションから出た美術品も展示された。現在でも、ソウル国立博物館^⑦や平壤博物館に、これらの文物を見ることができ。

一九一六年、文化財に関する初めての法律が公布された^⑧。李朝時代の法律は、高麗時代以後の文物にしか適用されず、しかも、王族

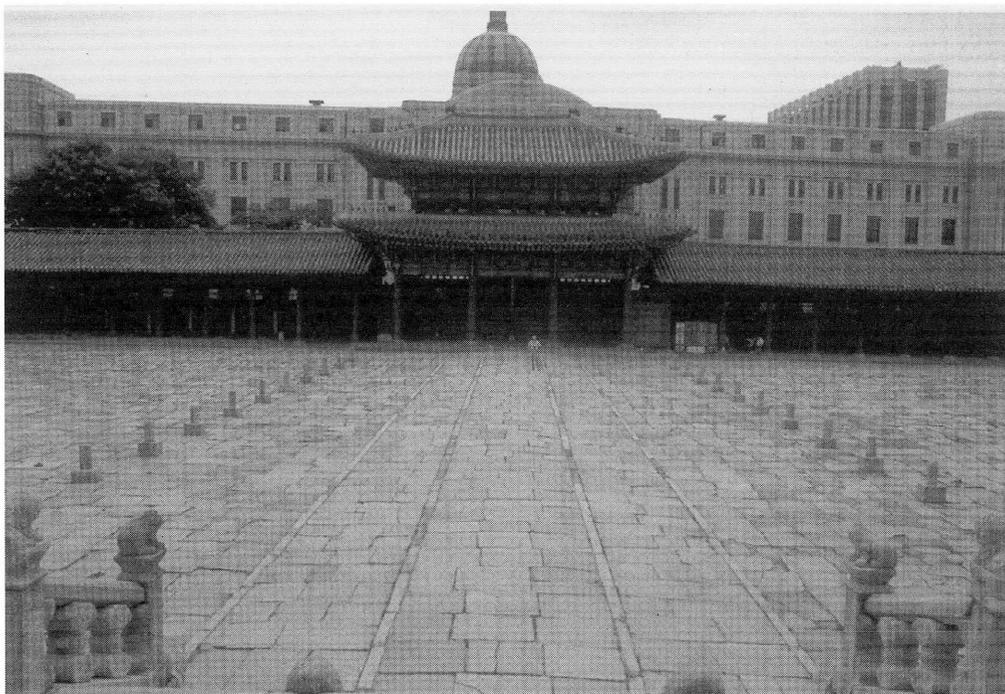


図3 景福宮からの眺め。総督府の本部が、いかに宮殿の眺めを台無しにしたか理解できよう。(著者撮影)

の墳陵にのみ関連する規定であった。官公吏のなかには、望郷の念から、政府の公的援助なしに、建造物の保存を推進したものがいたかもしれない。しかし、多くの場合、寺院や政府の施設も必要な場合にのみ修復が施されるだけであった。その結果、朝鮮の遺物やモニュメントは、荒廃の憂き目にあつたり、無差別的な略奪の対象となつていた⁽⁴²⁾。さらに、日清戦争（一八九五年）や日露戦争（一九〇四—一九〇五年）の戦乱の中で、大日本帝国の軍部が、無数の朝鮮の遺物を略奪したという報告もなされている⁽⁴³⁾。こうした損失から遺物を守るため、八条からなる規定が制定され、施行されたのである。

——第一条において、古蹟と遺物が、以下のように定義づけられている。古蹟とは、新石器、貝塚、洞穴住居、墳陵、宮、院、門、廟、社、祭壇、寺、窯が発掘される先史の遺跡であるとされ、さらに、塔、碑、鐘、青銅製の仏像、燈、工芸品も、この範疇^{はんちゆう}に含まれた。（現在の「朝鮮の (Korean)」[国宝 (국보 kokbo)] 指定のシステムも、この第一条を元にして開始されたものである。）

——第二条では、古蹟や遺物が確認された場合の規定が述べられている。これにより、確認された古蹟や遺物は、古蹟認定の指定を受け、範疇とサイズ、場所、所有者の氏名、保存状況、古蹟にまつわる伝承や伝説、そして保存の方法が記載されることになった。

——第三条では、古蹟や遺物が荒らされたり、みだりに改変された場合の規定がなされている。いかなる理由であれ、過ちを犯した



図4 高句麗漢王墓の調査（朝鮮総督府編『朝鮮古蹟図譜』第2巻 1915年刊より）

古蹟登録の手続きが定められた。

——第五条から八条では、古蹟の移動、修復、保存の際には、総督府の許可が必要であることが規定されている。

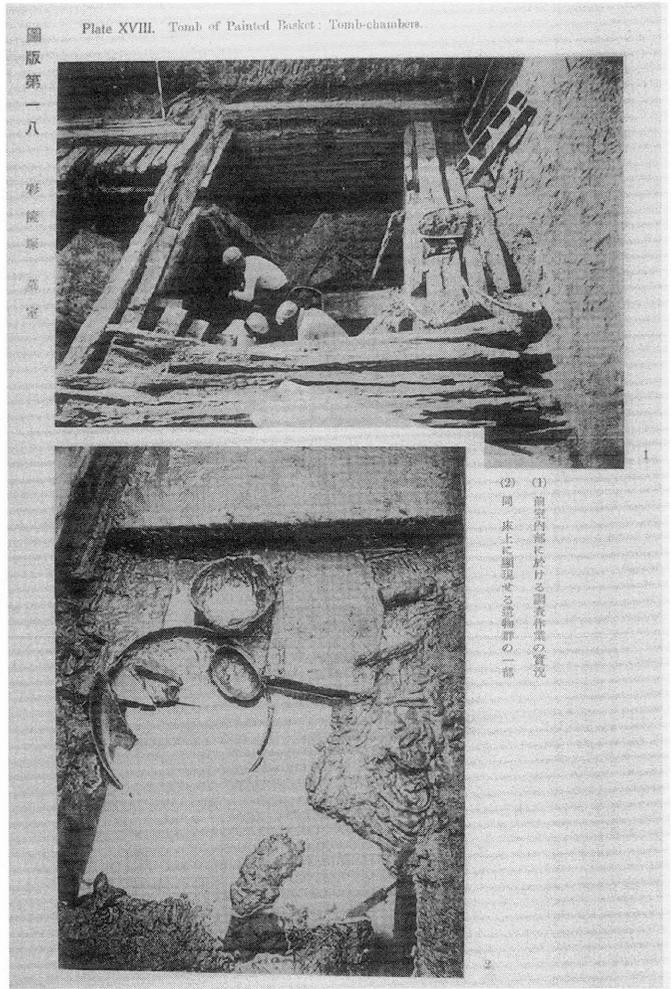
このように、包括的かつ明確な法令によって、日本の植民地政府は、数百年からなる考古学的かつ歴史的指定地と建造物の登録の責任を負うことになった。朝鮮の文化財保存に関わる条項では、「朝鮮」の歴史的遺物や古美術品の国外流出を禁止していたが、しかし、釜山（부산 Pusan）や新義州（신의주 Sinju）などの港から、継続的に密輸が行われていた。総督府は、保存法の公布とともに、朝鮮古蹟調査委員会を組織した。この委員会の主要な目的は、学術調査および教育活動と、総督府のための文化施設を設立することの二点であったが、植民地政府による保存、修復、建設、および登録活動



図5 高句麗瓦当（梅原末治編『楽浪及び高句麗古画図譜』京都便利堂 1935年刊より）

者は報告の対象となり、六ヶ月以内の禁固の刑に処されることが規定された。警察署長は、その後、総督府に報告書を提出することになっていた。

——第四条では、



(1) 前室内部に於ける調査作業の状況
(2) 同 床の上に顯現せる遺物群の一部

図6 楽浪彩甕塚（『古蹟調査報告』第一 1934年刊より）

原田淑人、池内宏、梅原未治が加わった。

一九一六年から一九二一年にかけて、楽浪、

新羅、高句麗、百濟、そして任那（伽耶）時代の

遺跡が発掘され、大きな発見が相次いだ。この

五年間に百十件を超える発掘が行われている。

一九〇五年、満洲の通溝（통구 T'ung-kou）地

方において、鳥居龍蔵は、初めて高句麗の要塞

を発見した。彼は、また、巨石を段状に積み上

げた塚と動物文様の瓦に特徴をもつ「大王墓

（대왕묘 Taewang-myŏ）」と「將軍塚（장군묘

Changun-ch'ong）」を確認したことも有名で

ある。鳥居の調査で収集された建築物の装飾品

や仏像などの文物は、現在、東京大学博物館の

東アジア・コレクションの一部となっている。

一九〇九年には、今西龍が、平壤の高句麗時代の遺跡を調査し、江

東区漢王墓（강동구한묘 Kangdong-ku Hanwang-myŏ）の城址を

発見した（図4）。

一九一二年、今西、谷井、栗山の三名は、江西三墓里（강서삼묘

리 Kangso samnyŏli）の壁画古墳を発掘した。鮮やかに揺らめく

色彩で際立つこの古墳のフレスコ壁画には、宮廷や邸宅でくつろぐ

高句麗人の姿、舞踏し、狩猟し、レスリングをする人々の姿が活写

などのあらゆる調査を管轄する中枢機関としても機能していた。さらに、委員会は、遺跡の研究のみならず、博物館展示、展示品の収集、測量、写真撮影、複製制作、工事などの責任も負い、その活動の報告を行う義務があった。委員会のメンバーは、関野、黒板、今西など、朝鮮および日本の大学に所属する専門家によって構成され、日本有数の知性が、朝鮮というフロンティアの研究活動に参画することとなったのである。一九一八年には、この委員会に、濱田耕作、

されている。この壁画は、詳細に亘って調査、測量され、複製も制作された。墳墓が盗掘を受けた時代以降、高句麗の副葬品が発見されることはそれまでほとんどなかったので貴重であった。一九一六年、この壁画は、小泉顯夫によって再度複製されている。また、墳墓の天井画が、王陵のものであったことも、このときに明らかにされた。豆満川(두만강) Tumangang) 上流にある南満洲の通溝地域^⑧における高句麗最初の首都の発掘は、栗山の指揮によって行われている。この発掘によって、高句麗の墳墓には、南の百済と新羅の玄室と壁画の影響がみられることが明らかにされた。

一九二〇年代から一九三〇年代にかけて、高句麗の遺跡調査をしたのは、三上次男であり、南満洲鉄道株式会社の調査として行われた^⑩。一九三八年、朝鮮古蹟研究会で報告をした彼は、満洲鉄道の建設によって幾千もの墳墓が破壊されているのを、ただ傍観してはならないと感じ、鉄道会社に、調査許可を要請したのである。

彼らの活動によって、「大王墓」と「將軍塚」の墳墓が、都市建設工事の犠牲とならずに済んだ^⑪。

一九一六年、関野、谷井、栗山の三人は、十ヶ所に上る楽浪の墳墓を発掘した。この調査は、測量技術、移動の方法、写真技術の点で、朝鮮半島での初めての「学術的な」発掘であり、朝鮮考古学史上の分岐点となっている^⑫。その発掘報告も、地図、記録、デッサン、そして出版物の質の高さからも、比類のない素晴らしいものとなっ

ている。当時、漢時代(紀元前二世紀―二世紀)の漆器や翡翠、陶器や金、寶石などの副葬品を埋蔵し、しかも複数の玄室をもった瓦と磚^⑬の墳墓は、世界のどこにも発見されていなかった。植民地時代の終わりまでに、日本人学者は二千以上の墳墓を確認し、そのうちの数百を発掘した。なかでも、おそらく、最も大きな功績は、平壤を流れる大洞江(대동강 Taedongang) 南部にあった楽浪の拠点、土城里(토성리 T'osongri) を確認したことであろう^⑭。その他の漢の遺跡と墳墓は、漆器や印、あるいは瓦に刻まれた銘から、一世紀から四世紀のものだと判断されている。

ここ数十年、大韓民国では、楽浪の存在をめぐる議論が沸騰している^⑮。論争を引き起こしたのは檀国(단국 Tan'guk) 大学の尹乃鉉(윤내현 Yun Nae-hyon) 教授^⑯で、彼は、四十年前に北朝鮮の学者が取った態度を再び甦らせたのであった^⑰。一九四九年、洪起文(홍기문 Hong Ki-mun) は、先史の土着的な朝鮮国家に与えた「外来の」影響を否定すべく、朝鮮半島における漢の領土、楽浪の存在を否定した。平壤で発見された遺物も、単に、高句麗の遺物と同様に、中国からの輸入品であると主張したのである^⑱。さらに彼は、日本人学者によって発見された「漢の楽浪」と銘の入った遺物も否定した。植民地時代に、その地方人たちが、日本の行政官や兵士に高額の値段で売りつけるために細工した捏造品だと解釈したのである^⑲。しかしながら、私見では、洪起文の「扇情的な」議論は説得



図7 漢時代の碑文「Nien-ti-hsien」(粘蟬県)。Nien-ti-hsienは、『漢書』に記録された朝鮮半島25県のうちのひとつである。(朝鮮総督府編『朝鮮古蹟図譜』第1巻 1915年刊より)

力に欠けるように思われる。なぜなら、考古学調査に駆り出された現地の日雇い労働者の大半は、文盲の農民であり、遺物として出た漆器や石碑、あるいは瓦などに古代中国の漢字で銘を刻むことができた者がいたとは到底考えられないからである。また、日本人が、考古学的遺物を不正に埋めたり、捏造したりしたという国粹主義的な朝鮮の考古学者による非難も、博物館が所蔵するコレクションの現状とは矛盾するものである。コレクションにある美術品は、発掘された数百の墳墓や漢の土城址から出た真正正銘の遺物である。さらに、考古学的なデータも、間違いなく、楽浪を漢時代の古代中国の行政、商業、技術の中心とする歴史的記述を確証するものとなっている⁽⁶⁾。実際、漢字、武器、陶磁器の製法、漆器、宝石、建築など、

楽浪を通じてもたらされた漢の影響は、三国時代の朝鮮半島や、古墳時代の日本にも明らかである⁽⁶⁾。

一九二〇年、新羅時代の墳墓からの意外な発見に、人々は、驚愕することとなった。豪華な金冠、金銀細工、宝石類、輸入されたローマン・グラス、優美な陶器などが発掘されたのである。これほどまでに豪華で、洗練された細部や変化に富む細工物は、それまで、朝鮮半島では発見されていなかった。こうした副葬品が発掘されたのは偶然からであった。農家の床下に埋もれていた金冠が偶然発見されたのである。その後、矢継ぎ早に、慶尚北道(경상북도 Kyongsangbukdo) 地方の大邱(대구 Taegu)と慶州付近にある金冠塚(금관총 Kumkwan-ch'ong) / 金鈴塚(금령총 Kumnyong-ch'ong)、瑞鳳塚(서봉총 Sobong-ch'ong)、梁山夫婦塚(양산부부총 Yongsan Pudu-ch'ong)において、発掘が行われた。三国時代の古墳遺物のなかで、新羅の副葬品は、ことのほか保存の良い状態で発見された。新羅の墳墓では、玄室が、小山の奥底深くに置かれており、数百年に亘って、盗掘者たちの目を逃れることができたからである。

統一新羅時代(六六八―九一八年)における最も重要な寺院である皇龍寺址(황룡사지 Hwangryongsa-ji)が発掘されたのは、一九一六年のことであった。その規模において、この寺院は、知り得る限り、朝鮮史上で最も巨大で複合的な寺院であり、今日もなお、

発掘が続けられている。また、日本の考古学者たちは、慶州にある四天王寺(사천왕사 Sach'onwangsa)と瞻星臺(첨성대 Ch'omsongdae)の寺址も測量を行い、記録を残している。南漢江褶曲部の、ソウルの石村洞(석촌동 Sokch'on-dong)と夢川洞(몽천동 Mongch'on-dong)近郊では、百済の土城址と石棺墓の遺跡が発見された。百済時代の後期、主要都市は、慶州と扶餘に再び移されていたのであった。全羅南道(전라남도 Chollanandongnam-do)では、巨大な古墳群である潘南面(판남면 Pannam-myon)が発見され、出土した金冠や寶石から、百済時代初期のものと同定された。王族の墳墓は、また、陵山里(릉산리 Nungsanri)でも発見されている。

伽耶の石棺墓群は、朝鮮南東部、昌寧(창녕 Ch'angnyong)、高靈(고령 Goryeong)、星州(성주 Songju)、金海(김해 Kimhae)の丘の上に位置していた。濱田、今西、黒板らの考古学者によれば、これらの遺跡は、百済や新羅の遺跡と似ているとともに、『日本書紀』の記述を裏付けるように、九州にある遺跡とも明らかに否定しえない関連性があるという。⁶⁰⁾

一九一六年以降、保存活動は、朝鮮総督府とその博物館によって、行われることとなった。予算は徹々たるものであったので、最重要の建造物と崩壊の危険に晒されている建造物に限って、保存活動が進められた。それでも、ソウルの「東大門(동대문 Tong-

daemun)」が修復され、陵墓の保護のため柵を設け、宝塔の基部を固定するなどの作業が行われた。さらに、博物館と学務局は、数百年の無関心によって荒廃し、崩壊の危機にあった仏国寺(불국사 Pulguksa)と石窟庵(석굴암 Sokkuram)の修復計画へと乗り出した。⁶¹⁾ これらの地区は、美しさと工学技術の点において、朝鮮史上、最も傑出した建築物として、今日、——正當に——、評価されている。⁶²⁾ 石窟庵の修復には、十六年、一方、仏国寺には八年の年月を要した。植民地時代の技師たちは、新羅の建築と文化の盛期たる八世紀に建立されたこれら仏教寺院の原型を保つよう細心の注意を払って作業を行っている。朝鮮総督府と博物館は、また、今日まで残る最古の木造建築である高麗時代中期の浮石寺無量壽殿(부석사 무량수전 Pusoksa Muryang Sujon) (一三世紀)でも修復活動を行っている。

朝鮮総督府の保存活動では、都市部から離れ、保存がままならぬ重要な建造物に関しては、博物館周辺に移築して管理することになった。多数の石塔や石碑、石燈籠が、今日でも、ソウルの中心部にある景福宮殿周辺の歩道に確認できるのはそのためである。

また、博物館館員は、「国宝」を指定し、博物館コレクションとすべき遺物や地区、美術品の選定にも関わった。博物館カタログには、ハングル語(Korean)ではなく、日本語と英語、そしてときに漢文(Classical Chinese)で、作品解説とキャプションがつけられた。⁶³⁾

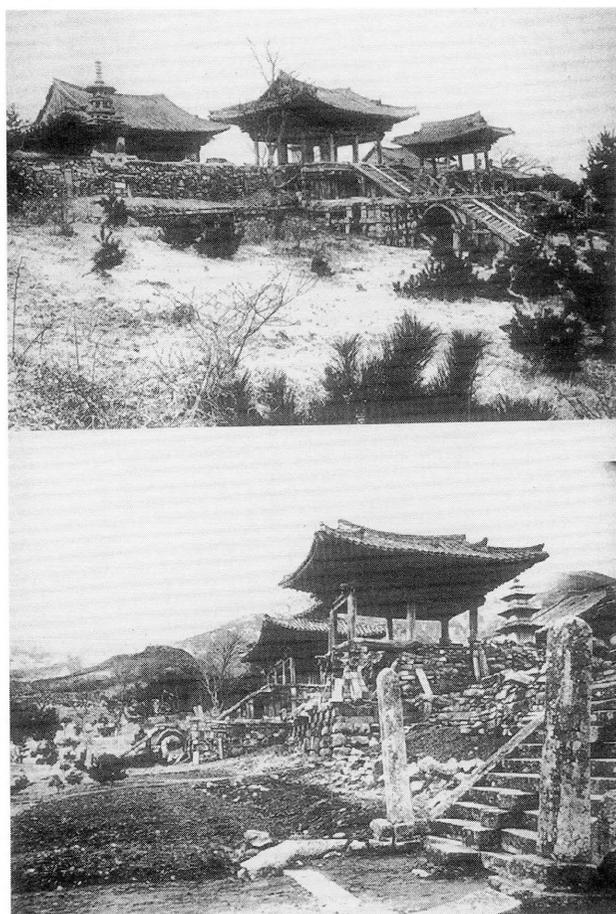


図8 修復前後の仏国寺の情況（朝鮮総督府編『朝鮮古蹟図譜』第4巻 1916年刊より）

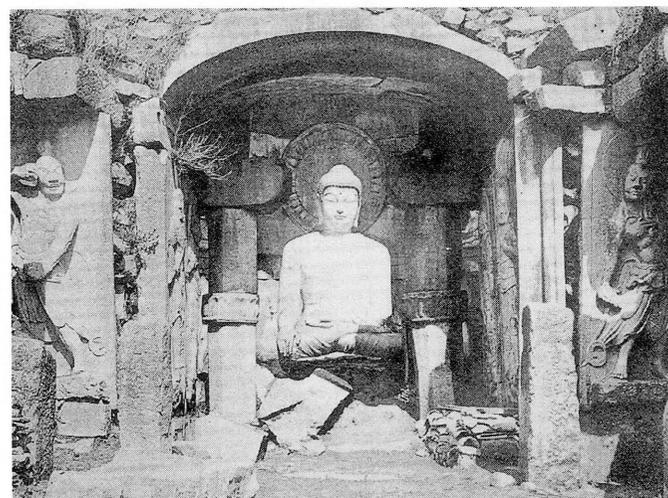


図9 石窟庵修復時の様子、1908年頃（朝鮮総督府編『仏国寺と石窟庵 朝鮮宝物古蹟図録』第1巻 京都桑名文星堂 1938年刊より）

このように、朝鮮の過去を代表する「価値ある文化財と博物館所蔵品」に関して、その美学的基準を最初に決定したのは、日本植民地時代の学者やエリートたちなのであった。

一九一三年、関野貞は、『朝鮮古蹟図譜』の第一巻の刊行に取り掛かっている⁶⁶⁾。この書は、全十五巻に亘って、写真図版や地図などを整理しようとするものであった。一九一五―一九三五年の二十年の歳月を費やして、この書は、楽浪の遺物、三国時代の墳墓、仏教寺院、陶磁器、仏教彫刻、李朝時代の絵画などを網羅した。また、

全七巻の『古蹟調査特別報告』（一九一九―一九三〇年）も刊行され、楽浪の墓や新羅の墳墓、および高句麗の遺跡の主要な発掘記録がまとめられた。毎年定期的に刊行された『古蹟調査報告』（十九巻、一九一八―一九三七年）では、朝鮮半島全土で行われた発掘調査の報告がなされている。さらに、一九三四年から一九四〇年にかけて、朝鮮古蹟研究会は、『古蹟調査概要』において、補足的な報告を行い、それぞれの調査団の活動や、主要な楽浪の遺跡や三国時代の墳



図10 慶州古美術保存協会による新羅陶器の分類 (朝鮮総督府編『朝鮮古蹟図譜』第3巻 1916年刊より)

墓の発掘に関して報告を行っている。

三 植民地主義的人種理解と 朝鮮文明の衰退に関する議論

初期の朝鮮に関する日本の学術調査は、三国時代の考古学的発見に関して、決定的な貢献をした。三国時代の遺物を分類し、博物館コレクションとして初めて展示したのは日本人であり、また、古代遺跡や建造物の保存に関する法令を制定している。さらに、調査報告の刊行物は、写真や地図、挿図の質に関して、当時の他国の水準を上回るものであり、考古学的な発掘や資料収集の方法に関して、学術的な基礎を打ち立てることになった。この分野を切り拓いた先駆者たちは、朝鮮考古学の次世代の教育にも大いに貢献し、一九四五年の独立後も、発掘を指揮できる朝鮮の学者が育つまで、影響力を保ち続けた。発掘法や作図、挿図の形式など、日本の技術や記録方法は、百年後の今日ですら、朝鮮考古学の教育や刊行物に、その影響を見出すことができる。今日の朝鮮の発掘報告は、その全体的な発表形式や構成、レイアウトに関して、植民地時代に行われた形式を原型として保っている。例えば、現在の標準的な分析においても、日本の考古学者が行ったように、図示しながら分類する方法と報告方法が、今日まで、継続的に受け継がれてきたのには、おそらく、

朝鮮と日本の言語の類似性、とりわけ、考古学や美術史の語彙を共有しているという背景もあるだろう。

日本の考古学者や歴史家の貢献は大きかったが、しかし、彼らを用いた解釈格子には、総合的にみて問題が多い。人類学的調査も、史料研究も、考古学的データも、全て、民族闘争を軸にした発展史の形式に沿うように配置され、朝鮮文明を単一的展開として再構成しようとした。そこで重視されたのは、以下の四つの考え方である。(1)「日鮮同祖論」、すなわち、朝鮮と日本の民族の起源が同じであるという思想、(2)日本の天皇が、古代の朝鮮(四―七世紀)を支配したという主張、(3)朝鮮史の展開は、主に、中国文明という外部の影響に左右されてきたということ、それゆえ、朝鮮独自の起源は想定しえない、という思想、そして、(4)朝鮮文明が退行かつ停滞しているという考え方であった。

韓国併合から植民地時代にかけて(一九〇五―一九四五年)、日本の行政官と学者は、歴史研究や考古学調査とともに、民族誌学的研究も行っている。日本の第一級の専門家が、「朝鮮人」研究に手を染め、その「民族性」を詳細に記録したのである。その記録は、朝鮮の慣習、気質、哲学、宗教、道徳、さらには犯罪傾向など、あらゆる局面に及んだ。植民地支配のマニュアルとして、こうした「朝鮮人」研究は、民族や言語、歴史、習慣などの研究が、植民地支配の成功に不可欠であり、帝国の利益となると明記するのを忘れな

った。

こうした研究では、朝鮮の退行性が、「他律性」と「事大主義」という二つの性質に結び付けられて説明された。そのほか否定的な民族的特徴として、創造力の欠如、形式への固執、文盲、党派的な諍いへと走る傾向、個人所有権と公有権が区別できないこと、個人主義、権威主義などが挙げられた。これらの欠点は、時代を遡って、両班の知識人階級の規則と彼らと官僚との恒常的抗争と関連づけられもした。かくして、朝鮮国家の衰退は、固着した儒教と李王朝の党派主義によって引き起こされたのだと、植民地政府は報告したのであった。さらに、日本の行政官は、これまで支配した王朝は、水準の低い政府で、誤って、朝鮮の人々の窮状を批判してきたのだと指摘している。彼らの分析によれば、朝鮮の人々は、その欠点に関して非難されるべきではない。なぜなら、古代以来、彼らが列強に囲まれてきたがゆえに仕方ないのだと言うのである。北はステップの遊牧民とロシアの帝国、西は強力な中国、そして東は日本、これらの列強に囲まれた不遇な環境のもとでは、朝鮮文明はそれ自体として発展しえなかった、と日本の研究者は結論づけたのである。こうした評価に至った日本の植民地行政は、朝鮮の人々が独力でできない以上、日本人が彼らを「暗黒時代」から救い出さねばならないと考えるようになったのであった。かくして、啓蒙的な同化政策が強制され、そのもとで、朝鮮の人々は、日本人となり、天皇の臣民

となるよう〔「皇民化」〕しむけられたのである⁽⁸⁷⁾。さらに、先天的に日本人が民族として優れているとする議論によって、日本語教育と日本史と日本文化の教育の強制が正当化された。植民地支配者として、日本人は、優れた政府の指導によって、朝鮮の人々が、やがてその悪癖を脱し、優れた民族の影響を受けることになることを確信していたのであった⁽⁸⁸⁾。

韓国の人々と歴史や文化に関する否定的な解釈のなかで、最も大きな論争を引き起こしたのが、朝鮮古代史と先史に関する日本側の植民地主義的解釈である⁽⁸⁹⁾。日本の歴史家は、初期「大和」の「日本〔Japanesque〕」軍による任那時代の侵略と征服が、直接的に、日本古代国家の天皇の起源と朝鮮の三国王朝の形成に関わるものであると解釈した。朝鮮の歴史家は、日本の歴史家たちが、広開土王碑（哥개토왕비 Kwanggaetowangbi）の碑文の内容を故意に読み替え、一九世紀から二〇世紀にかけての朝鮮支配について、歴史的先例を捏造したのであると、現在でも批判している⁽⁹⁰⁾。日本海峽を隔てる両側の国粋主義的歴史家たちは、今でも、歴史的な軍事制圧と人種的で文化的かつ軍事的な優越性を同一視しているのである。

第二次世界大戦後の国粋主義的歴史家たちは、一樣に、日本の植民地主義的理論を批判し、それが、朝鮮の人種的かつ文化的劣等性と中国への従属（「事大」）を故意に強調するものであったと訴えている。彼らによれば、その理論とは、「日本の植民地政府の手先

（「御用」）(고용 oyong) となった学者」が捏造した「悪魔的計画」であり、「その悪意に満ちた中傷によって、朝鮮の歴史が歪曲されてしまった」という⁽⁹¹⁾。それゆえ、「日本の帝国主義的歴史編纂（日帝皇国史観⁽⁹²⁾）(일제황국사관 Ilche hwang-guk saowan)」は、今日でも、朝鮮の民族と文化的アイデンティティを「絶滅」（「民族抹殺」）(민족말살 minjok malsal) させるべく用いられた植民地時代の武器とみなされ、矢面に立たされている。その結果、植民地時代における考古学的発見や保存活動、あるいは古代朝鮮の遺物やモニュメントに関する日本の貢献も、全て同じように無視され、さらに、パオニアとして研究に従事した学者たちも、最終的には植民地支配に知的かつ歴史的正当性を与えた「墮落した人種差別主義者にして帝国主義者」に貶められ、植民地時代のスケープ・ゴートとなってしまう⁽⁹³⁾。

その学術的な貢献を認知するとしても⁽⁹⁴⁾、日本の学者による考古学のかつ歴史的な解釈は、一九世紀末から二〇世紀初頭にかけての植民地主義的人種差別のイデオロギーを代表するものとなっているのは確かである。植民地主義的人種差別は、二世紀に亘って帝国による世界支配の思想の主要な要素であった。植民者たちは、支配する領土への先天的かつ本性的な優越性の原理を一般化することで、「王統派的正統性と国家共同体との接合」を推進した⁽⁹⁵⁾。日本の植民地学もまた、民族と民族侵略、そして領土の征服を、国家の盛衰を

決定する重要な要素とみなして強調した。こうした民族に関する決定論的解釈は、朝鮮美術の歴史的建造物や考古学遺物の年代設定に関する植民地学的研究にまで影響を及ぼしている。例えば、美術史の分野において、初めて慶州の初期朝鮮仏教遺物の調査研究を行った関野貞は、これを、朝鮮における芸術的達成の頂点に位置づけている⁸⁰。しかし、朝鮮の仏教美術が日本の奈良と平安美術に及ぼした影響の重大さを初めて認めた関野も、朝鮮研究を、日本と中国の関係を理解する端緒にすぎないと考えていた。彼によれば、朝鮮は、中国文化を日本に伝えると同時に、日本美術からも影響を受けていたのだ⁸¹。また、関野は、朝鮮美術が、統一新羅時代（六六八—九一八年）以後、凋落^{ちようらく}したと理解していた。さらに、彼は、小さな国であるがゆえに、完全な独立を果たせないまま、朝鮮美術の発展が阻害され、建造物も小さい規模に留まったと考えていた⁸²。古代朝鮮の調査の結果、関野が得た結論によれば、朝鮮民族は、優れた美術を生み出す生来の能力を持っており、それゆえ、朝鮮総督府が奨励すれば、朝鮮民族はまた、かつての栄光を取り戻すであろうというのである。彼は、五百年に亘る李王家の過ちによって、かつてかような優れた創造力をもっていた民族が、芸術への関心を失ったのだとし、王朝の政策を非難した⁸³。この結論をみれば、関野が、芸術的能力ですら、民族の本性的な能力の産物であると理解していたことは明らかである。

藤田亮策は、総督府博物館とその調査部門を指導した考古学者であった⁸⁴。古代朝鮮文明の展開に関する彼の見方は、植民地主義的な考古学解釈を反映した典型的なものとなっている⁸⁵。彼は、古代朝鮮史を、「石器時代」、「金石併用期」⁸⁶、「漢王朝楽浪文化」、「三国時代」の四つの時代に、はじめて区分したといわれている。藤田によれば、石器時代は、漢江沿岸の岩寺里（암사리 Amsari）で出土した櫛型土器に代表される。また、朝鮮における新石器時代の遺物は、シベリアや満洲の遺物に通じるものがあると彼は主張し、この点で、朝鮮における先史遺物を初めて同定した鳥居龍蔵の意見と一致していた⁸⁷。藤田はまた、朝鮮のドルメンを、地域分布と様式的な差異から北部と南部の二種類のタイプに分類したことも知られている。さらに、ドルメンから出土した青銅器が、はじめて「金属を使用した」民族、「濊貊族（왜맥족 Yamaek-jog）」の手になるものであるとの仮説も出している。この民族は、周時代の末期（紀元前七世紀頃）、山東地方から朝鮮北西部の平壤南道（평양남도 Pyongan-namdo）と黄海道（황해도 Hwanghae-do）地方に移住した民族とされていた。この濊貊族が、ただちに先住民の文化を追放⁸⁸し、支配力を発揮して、初期の半地下壕式の家屋を作って定住し、村を形成したのだと考えられたのである。この時代を藤田は、「金石併用」時代と名付け、考古学的な指標として、半島全土に発見される細身の短剣（「細形銅剣」）（세형동검 sehyong dong-gom）を挙げている。

藤田にとって、「金石併用」文化は、白鳥が主張した濊貊族の「歴史上の」到来を考古学的に証明するものであった。⁹⁹ また、藤田は、「魏志」にある「東夷民族」の伝承から、古代朝鮮の埋葬習慣や衣装、宗教の「概要」記述であると理解し、古代朝鮮の文化が中国の後漢からの影響以上に、北方の遊牧民である「トゥングス(高句麗 Tongus)」との関係に深く文化的に影響されていることを明らかにした。¹⁰⁰ 朝鮮半島から出土した金属器の技術、武器の意匠、裝飾モチーフが、北方におけるスキタイ族と関連するものであることを証明したのである。¹⁰¹

藤田によれば、朝鮮半島における「土着の濊貊族」が中国化するのには、漢が侵入し、紀元前一〇八年に漢の支配体制が確立したときである。このとき、文化は、「漢の楽浪」より発信されることとなった。藤田は「東の燈台」と名付けて、楽浪の芸術、文化、技術の優越性を表現した。¹⁰² 漢の支配体制とその影響力は、さらに南東へ数百キロメートル離れた慶州の入室里(입실리 Ipsilii)にまで及んでいた。その地から、漢から影響を受けた刀剣や槍、儀礼用の鐘が出土している。¹⁰³ さらに、藤田にとって重要であったのは、この「漢から影響を受けた」金石併用の文化が、日本の弥生文化に移植されたということであった。¹⁰⁴

多様な「民族」の影響のなかでも、後期三国時代と日本の古墳国家の勃興に関わる要因として藤田が強調したのは、濊貊族、扶餘、

高句麗、そして沃沮(옥저 Okcho)の部族を通してもたらされた中国文化の影響である。¹⁰⁵ 日本と朝鮮における習慣や衣装、生活様式などの考古学的かつ歴史的な類似性は、古墳時代に、両国の間で文化的かつ宗教的な関係が取り結ばれていたが故のことであると彼は考えていた。こうして、藤田は、考古学史料を利用して、東夷民族の起源に関して、すでに定説となっていた歴史理論を補強したのであった。¹⁰⁶ 彼以前の日本の歴史家と同様に、藤田も、日本人の起源への関心から朝鮮の先史の研究に入っていたのであるが、それは、次の彼の言葉からも理解されるところだろう。「世の朝鮮文化を語るもの、多くはシナ文化の模倣であるとし、又其の伝達の橋となつて、吾が上代文化は漢・六朝文化の影響によって成るかの如くに説いている。「しかし、……」大陸文化と称するは決して秦漢文化の直輸入を意味するものでなく、朝鮮半島を通過したるもの、即ち半島の地に一度培養され、そこから海を渡って九州に、本土に根を下したものであって、多分に半島の土地と人とに親しみのある多少変化したものであったのである。¹⁰⁷」

藤田と関野の総合的な調査によって、考古学的年代設定と美術史的データは、植民地主義における民族解釈の枠組みへと回収された。かくして、植民地学のもとで、芸術的かつ文化的、技術的な変化も、朝鮮半島に生活様式と規則を強制した優性民族の一連の到来と征服によって説明されることになったのである。

四 朝鮮の考古学における「侵略幻想」

このように、日本の考古学者と歴史家の学術的貢献は、その問題の多い「民族決定論的な」解釈格子によって、覆い隠されてしまった。旗田巍が指摘するように、今日の日本でも、朝鮮に対する一般認識は、前記の学者たちによる研究の影響を被り、朝鮮文明が中国という外部の影響を通じてのみ発展し、独自の展開をもつことができなかつたと考える傾向がある。旗田巍は、植民地体制下に行われた考古学と歴史編纂のイデオロギーと歴史的背景を組織的に明らかにした最初の歴史家であり、彼による朝鮮歴史編纂の重要性は否定しえないが、しかし、彼は、朝鮮古代史を分析する新たな解釈を提出できずに終わった。⁽¹⁰⁾ 韓国の民族主義的な考古学者と歴史家は、かつて日本人が朝鮮で行った学術研究を全否定する立場を取っており、それゆえ、古代における朝鮮と日本の交渉を、正反対の「影響」の方向性、すなわち、朝鮮から日本という一方通行によってしか理解しようとしな⁽¹¹⁾い。

大韓民国では、金貞培と尹乃鉞の極右思潮により、朝鮮の先史を書き替えて、かつての日本人の貢献を全否定しようとしている。⁽¹²⁾ 彼らが、植民地主義的解釈のなかでも強く反対しているのは、李丙燾、千寛宇、李基白などの先駆者と同様に、檀君と箕子(기자 箕子)、衛湍(위만 Wiman)の歴史解釈とその整合性に関してである。ま

た、漢の時代の楽浪とその朝鮮半島での支配力の解釈、三国時代初期における日本との関係についての解釈なども問題とされている。

これらの問題は、朝鮮と日本の民族的起源と各文明の固有性の理解にとつて、決定的な要因となると考えられるようになって以来、現在に至るまで、熱く議論される主題であり続けている。つまり、朝鮮の国粹主義的な歴史家のみならず、日本の研究者も、文化交流を説明するためには、いまだに、一方から他方への「征服」や「影響」という考え方を基礎に置いているのである。こうした思想に囚われている限り、帝国主義的で植民地主義的な伝統に揺さぶりをかけることはできないであろう。かつて私は、今日の朝鮮先史研究者の研究を「侵略ノイローゼ」と呼んだことがあった。⁽¹³⁾ いくつかの例外を除いて、朝鮮と日本の考古学研究と美術史研究、そして歴史研究は、丘を越え、谷を下り、海を渡って伝わった「影響」という考え方に染まり切っている。地理的には、中央アジアのステップ(江上波夫の「騎馬民族理論」に典型的)から、シベリア山脈(紀元前1000年頃にさかのぼる青銅器時代)に至り、⁽¹⁴⁾ 南は、(朝鮮のドルメンの起源として)インドネシア諸島にまで、こうした「影響」に関する研究はその領野を広げている。

これらの研究者のうち一人として、「影響」という考え方そのものを規定しえたものはいない。私は、氏族や部族、民族、そして(あるいは)国家全体の移動が、技術的かつ文化的な変化の担い手

となったとする彼らの信念そのものに、疑念を抱いている。この考
え方によって、これまで、考古学や歴史の議論において、北朝鮮の
共産主義者と大韓民国の学者、さらには日本の植民地主義者の間で、
憎悪の感情や皮肉が渦巻く原因となってきたからである。そして、
今日でも、外国人嫌いと愛国心、そして政治的な闘争が、朝鮮の考
古学と古代史を客観的に分析する際の大きな障害となっている。考
古学の金元龍^⑧や古代史の李基白^⑨、あるいは旗田巍などの日本海峽を
隔てる両国の最良の研究者でさえ、「侵略ノイローゼ」を克服する
ことはできていない。今日でさえ、朝鮮の考古学者と歴史家は、そ
れぞれの「民族主義的歴史^⑩」を再構成する戦いの渦中にあるのであ
り、南北に半島を分割された過去五十年間の相反する国家イデオロ
ギーと「朝鮮」の歴史記述のあり方に影響され続けているのである。
さらに、北朝鮮の史料を参照できないという現状によって、「朝鮮」
の民族や領土、そして国家の起源の「古代性」と「信憑性」をめぐ
る問題は、より複雑なものとなっている。かくして、南北朝鮮、そ
して日本の双方において、「アイデンティティをめぐる交渉」は、
誰が政治的な正統性を持っているのか、誰が、民族の古代性と純粋
性、文化的優越性、国家の起源を定義づける「正統者」として倫理
的な主張をしうるのか、この点を巡って紛糾しているのである。

国民のアイデンティティや民族性^⑪、あるいは文化を規定する要素
として考古学と考古学者の役割の重要性は、最近までに、十分認識

されるようになってい^⑫る。この種の国粋主義的なプログラムは、前
世紀の「植民地主義的考古学」への反抗としては自然なものだろう。
国家や民族集団のプライドを支え、士気を高める道具として、考古
学を利用することができるのである^⑬。とりわけ、「人々が、国家的
統一のない国に属している場合、あるいは、列強によって、集団と
しての権利を阻害され、脅かされ、さらには奪われたと感じた
とき^⑭」には、いっそう意識的にこの操作が行われるのである。考古
学はまた、政治教育においても、重要な装置として利用されること
もある。古代からの土着的な文明の文化水準の高さを強調するのに
役立つからである。考古学と古代史は、それぞれの国の英雄や神話、
そして伝説を捜し求める際に^⑮、文化的な原典を提供することができ
るのであり、それゆえ、考古学者とその調査結果は、国家体制を整
え、政治的団結を形成するのに決定的な役割を果たしてきたので
ある^⑯。

朝鮮半島の研究は、この地が多数の異なる文明の合流点に位置し
てきたがゆえに、きわめて啓発的な事例を提供している。過去五千
年に亘る朝鮮の考古学的遺物と美術品は、起源と発展の多様性を反
映しているのであり、それゆえ、文化交渉、文化衝突、文化変容と
順応など、要するに文化的な変化に関する形成プロセスを指定する
研究には、理想的な地域となっている^⑰。私たちは、土着的な起源と
ともに、古代から現代まで続いてきた外部からの影響、すなわち中

国や日本列島の影響とその適応を重視する方法論を公式化する必要があるだろう。こうした広範な地域研究の枠組みによって、個人、および集団の反日感情や反朝鮮の感情から解き放たれ、過去と未来における日本と朝鮮の文化折衝をよりよく理解することができるのである。

注

This article was originally Published in *East Asian History* (史), No. 7 (June 1994) Institute of Advanced Studies, Australian National University Canberra, Australia, pp.25-48.

一九九二年、ニューモークの財団 Social Science Research Council より助成金を得て、私は、東京に調査旅行を行った。本研究が主に典拠としたのは、東洋文庫（東京）と東京大学東洋文化研究所図書館の蔵書である。前者には、梅原末治のコレクションとして、手紙や地図、さらには、『古蹟調査報告』（東洋学術協会、東洋文庫、東京、一九六六年）で使用された図表や発掘地の写真、美術品など、数千点が収められている。梅原末治は、関野貞、濱田耕作、藤田亮策、今西龍などと同じく、植民地時代第一次世代の考古学者にあたる。彼は、六十年という長期に亘って、朝鮮の考古学研究を行った（梅原末治、「日韓併合の期間に行われた半島の古蹟調査の保存事業にたずさわった日と考古学との回想録」、『朝鮮学報』五一号、一九六九年、九五—一四八頁）。二〇世紀初頭に、朝鮮の考古学と先史研究のバイオニアとなり、指導的役割を負った専門家

たちの大半は、東京帝国大学歴史学科と建築学科の大学院生や教授陣であった。彼らの報告書と朝鮮の美術品コレクションは、現在も東京大学図書館と博物館に保存されている（東京大学博物館、『総合研究資料館展示解説』、一九八三年）。

(1) 括弧内の年号は、これらの国や人々が朝鮮半島を侵略した年を示している。ほとんどの歴史家は、朝鮮の王朝とこうした侵略者と、属国制度や軍事、政略結婚、さらには貿易や商業などに関して、外交的な交渉を行ったことを重視してはいない。例えば、七世紀半ばにおける唐と新羅との軍事協力は、新羅による朝鮮半島統一において決定的であった（John Jannieson, "Sangjuk Sagi and the Unification wars," Phd diss., University of California, Berkeley.）新羅と高麗の時代、王位継承者は、教育のため、そして、朝鮮の属国としての地位を受け入れるべく、中国の朝廷に派遣された。派遣された王子たちは、後に王となり、宗教、芸術、文学など、中国文明の精華を朝鮮半島に移入するのに決定的な役割を果たした。また、彼らは、ときに、「二重の媒介者」となって、中国に留まり続けることもあった。つまり、属国制度は、朝鮮の王朝にとって、文化交流と情報吸収の二つの目的を果たしていたのであった。

(2) 李瑄根 (이선근 Yi Son-gun) 『고려 민족思想과 日帝 및 日本文化의 關係』 (Uri minjok sasang kwa liche mit Ilbon munhwawi kwangye) 『韓國民族思想大系』 (한국민족사상대계 Han'guk minjok sasang taegyeye) (동아출판사) Tong-a haksul yon'guwon) 一巻 서울 (Seoul) 高麗大学校 (고려대학교 Koryo

- taehakkyo)' 一九七一年 三三三—三四七頁。及〽 Chang Daemu (장대무)' 『大韓偉人傳(上)』(대한위인전) 一卷 서울 (Seoul)' 아세아문화사 (Asea munhwasa)' 一九八一年。『丹齋申采浩全集』(단재신채호전집 Tanjae Sin Ch'ae-ho chonjip)' 第一版' 一卷 丹齋申采浩先生記念會(단재신채호선생기념회 Tanjae Sin-Ch'ae-ho sonsaeng kinyonhoe)' 서울 (Seoul)' 중앙문화연구소 (Hyongsol chulp'ansa)' 一九八七年。
- (3) 金容燮(김용섭 Kim Yong-sop)' 『日本韓國史敘述』(일본한국사서술 Ibon Han'guk e issoso ui Han'guksa sosul)' YSHB' 一九六六年 三—頁 一一八—一四七頁。及〽 李基白(이기백 Yi Ki-baek)' 『韓國史新論』(한국사신론 Han'guksa sillon)' 서울 (Seoul)' 일조각 (Ilchogak)' 一九七六年。
- (4) 千寬宇(천관우 Ch'on Kwan-u)' 『人物로 본 韓國古代史』(인물로 본 한국고대사 Immulobon Han'gukkodaesa)' 서울 (Seoul)' 중앙문화연구소 (Chongun munhwasa) 一九八三年。
- (5) 金貞培(김정배 Kim Chong-bae)' 『韓國民族的起源』(한국민족의기원 Han'guk minjok ui kiwon)' 서울 (Seoul)' 高麗大學校(고려대학교 Koryo taehakkyo)' 一九七六年。及 同著者' 『韓國古代의國家起源의形成』(한국 고대의 국가기원의 형성)' 서울 (Seoul)' 高麗大學校(고려대학교 Koryo taehakkyo)' 一九八六年。
- (6) 李丙燾(이병도 Yi Pyong-do)' 『三國遺事』(삼국유사 Sanguk yusa)' 서울 (Seoul)' 江西出版社(강서출판사 Kwang-so chulp'ansa)' 一九八一年。
- (7) 金貞培(김정배 Kim Chong-bae)' "Formation of Ethnic Korean nation and coming of its ancient kingdom states," *Korea Journal* 27, 4(1987) : 33-7.
- (8) 『韓國民族思想大系』(한국 민족사상사 대계 Han'guk minjok sasangsa taegy'e)' 一卷 서울 (Seoul)' 高麗大學校(고려대학교 Koryo taehakkyo)' 一九七一年。
- (9) 鈴木正行' 『北朝鮮社會主義と伝統の共鳴』(東京大学 一九九三年)。
- (10) 朴桓(박환 Park Hwan)' 『滿洲韓人民族運動史研究』(만주한민족운동사 Manju Han'in minjok undongsa yon'gu)' 三—卷 西江大學校(서강대학교 Sogang taehakkyo)' 서울 (Seoul)' 대중앙연구소 (Taejung munhwasa)' 一九九一年。
- (11) 『丹齋申采浩全集』(第二版) 一卷 丹齋申采浩先生記念會 一九八七年。
- (12) 前掲書。
- (13) 李基白(이기백 Yi Ki-baek)' 『民族과歷史』(민족과 역사 Minjok kwa yoks'a)' 서울 (Seoul)' 일조각 (Ilchogak)' 一九七七年。
- (14) 韓基彦(한기연 Han Ki-on)' 『一九三〇年代의 教育學振興運動』(一九三〇년대교육진흥운동 一九三〇nyondae ui kyoyuk-hak chinhung undong)' 『民族文化研究』(민족문화연구 Minjok munhwa yon'gu)' 一一二號 一九七七年 四九—一八〇頁。
- (15) 西川宏' 『日本帝國主義における朝鮮考古學の形成』(『朝鮮史研究會論文集』, 東京, 七號, 一九七〇年。及〽 李龜烈(이규열

- Yi Ku-yol) 『韓國文化財の秘話』(한국문화재의 비화 Han'guk munhwajae ui pihwa) 『서양』(Seoul) 韓國美術出版社(한국미술 출판사 Han'guk misul chulp'ansa) 一九七三年。西山武彦『韓國建築調査報告の謎』『韓國の建築と芸術』(西山武彦・伊丹潤編『韓國建築調査報告』一九〇四年初版、一九六一年、一九八八年復刻版)。
- (16) 李光洙(이광수 Yi Kwang-su) 『民族改造論』(민족개조론 Minjok kaejo ron) (一九三三年) 『李光洙全集』(이광수전집 Yi Kwang-su chonjip) 『서재수』(So Chae-su) 『서양』(Seoul) 『삼남』(Samjungdang) 一九六二年。
- (17) 白鳥庫吉『朝鮮研究』(『白鳥庫吉全集』所収、岩波書店、一九八六年)。
- (18) 鳥居龍藏『極東民族』、東洋人種學叢書、文化生活研究會、一九二五年。
- (19) Yoshisaburo Kuno, *Japanese expansion of the Asiatic continent : a study in the history of Japan with special reference to her international relations with China, Korea, and Russia*, 2 vols, 1937-1940, reprint ed., Washington, N. Y., Kenika Press, 1967. 旗田巍『朝鮮の歴史をどう教えるか』竜溪書舎、一九七六年。同『日本人の朝鮮観』勁草書房、一九六九年。同『日本と朝鮮(シベリウム)』勁草書房、一九六九年。
- (20) Edwin O. Reischauer, "Japanese archaeological work on the Asiatic continent," *Harvard Journal of Asiatic Studies* 4, 1, 1939.
- (21) 本稿での新羅、百濟、高句麗の三國時代の年代は、考古學遺物

- に基づいている。金元龍(김원룡 Kim Won-lyong) 『韓國考古學概説』(한국고고학개설 Han'guk kogohak kaesol) 第三版 『서양』(Seoul) 『일지사』(Ilchisa) 一九八六年。歴史学では、一三世紀の『三國遺事』の記録に基づいて、新羅を紀元前五七一年—紀元後九一八年、高句麗を紀元前三七一年—紀元後六六八年、百濟を紀元前一八一年—紀元後六六〇年としている。最初の考古學遺跡である古墳とその遺物は、紀元前一世紀以上にまで溯ることはない。ケネス・ガーディナー博士が、私に指摘(一九九三年)して下さったところによれば、高句麗が紀元前一世紀に存在していたことは、『漢書』の記録によって裏付けられているという。しかしながら、この時代の高句麗の考古學遺物は未だ発見されていない。
- (22) 藤田亮策、『朝鮮學論考』、藤田先生記念事業會、東京、一九五二年、六八頁。
- (23) 京城帝國大學の名称は、一九四六年に国立ソウル大學に変更された。博物館館長であった藤田は、植民地時代を通じて、ほとんどの発掘調査グループで仕事をしている。
- (24) 藤田亮策、『朝鮮の古蹟調査と保存の沿革』、『朝鮮総覧』、京城朝鮮總督府、一九三三年、一〇二七—一〇四七頁。
- (25) 崔淑卿(최수경 Chioe Suk-kyong) 『考古學成立以前の遺跡遺物觀』(고고학성립 이전의 유적유물관 Kogohak songnip ion ui yujok kwan) 『金元龍教授停年退任紀念論集』(김원룡교수퇴임 기념논문집 Kim Won-lyong kyosu t'eim kinyom nonjip I) 『서양』(Seoul) 『일지사』(Ilchisa) 一九八七年。
- (26) 注(24) 前掲書。

(27) 旗田巍、『日本人の朝鮮観』、一八二頁。

(28) 本稿では、植民地時代の制度や調査組織、書物のタイトルや固有名詞などに言及する際、「朝鮮」という言葉を使用した。朝鮮半島、朝鮮の人々、そして「李氏朝鮮」など、多くの場合に使用される言葉だからである。ここで特に記しておきたいのは、この用語を使用するのは、単に便宜的で、歴史的にも正確であるという理由からであり、いかなる軽蔑的な意味も含意していないということである。本稿では、植民地時代の制度や書物、組織などの表記は、全て日本語に従った。本文中にはじめて登場する際には、括弧付きで表記した。また、特に注記した場合を除いて、本稿で使用する用語は、日本の植民地時代の記録からの直訳である。

(29) 『鳥居龍蔵全集』、朝日新聞社、一九七六年。

(30) "A Special Number in memory of the Late Dr. Shintarō Kurakichi." *Memoirs of the Research Department of the Toyo Bunko*, No.15. (1956) 東洋文庫、一九五六年。斎藤忠、『鳥居龍蔵集』、築地書館、一九七四年。

(31) 旗田巍は、日本人学者による「満鮮史」の定義の有効性を疑問視している。彼によれば、満洲と朝鮮は、有史以来、同じ歴史を共有するものとして整理することはできないという。曰く、「朝鮮は、言語も文化も異なるひとつの固有の国家であり、朝鮮の歴史を満鮮史として記述することは、朝鮮の民族の存在を否定することにつながる。」(旗田巍、『日本人の朝鮮観』、一八二頁)。彼は、満洲と関連づけるこの説の責任を、古朝鮮と満洲の部族とを関連づけた池内宏や津田左右吉、今西龍による二〇世紀初頭の朝鮮研究に求めている。

る(一九六頁)。初期の「満鮮史」研究(例えば、池内、『満鮮史研究』、京都、祖国社、一九五一年)を全て無効と判断する旗田巍や韓国の学者の意見に対し、私は必ずしも同意しない。「満鮮史」研究は、考古学的、歴史的、民族誌的に、貴重な資料を提供しているからであり、また、中国北部の広大で、環境の変化にも富んだ地域には、紀元前五〇〇〇年の先史新石器時代より、無数の部族と民族が生活し、遊牧民族の国家や帝国の中心地ともなってきたからである。その地には、渤海やモンゴル、さらには中国の秦が関与した。また、朝鮮半島の考古学、歴史、文化的遺物は、モンゴルの草原地帯や中部アジア・ステップで刻々と移り変わった支配国家との直接関与を反映している場合や、係争や適応の跡を示しているものがある。それゆえ、私の考えでは、こうした広大な地域に朝鮮民族の起源を求めてきたここ四十五年の朝鮮の考古学者や歴史家の試みは有効ではない(金貞培 김정배 Kim Chong-bae, "Formation of Ethnic Korean Nation and coming of its ancient kingdom states," *Korea Journal* 27, 4, pp.33-39. 及び、金元龍『韓國考古學概説』、一九八六年)。また、単一的な朝鮮民族と文明が、紀元前一〇〇〇年の青銅器時代に、いかにして、他の「北方」起源の民族と文化から分離したのかという問いに対して、十分な説明を与えることは、未だにできていない。

(32) 鳥居龍蔵、『ある老学徒の手記』、朝日新聞社、一九四六年。

(33) 今西龍、『朝鮮古蹟の研究』、京城、近澤書店、一九三六年。

(34) ドルメンは、巨石時代の石墳墓で、朝鮮半島では、紀元前一〇〇〇年から七〇〇年に溯る。数千に及ぶドルメンが記録されたが、

- 発掘されたのは一握りの遺跡にすぎない。青銅製の武器や美術品の多くは、こうしたドルメンの石槨から出土したものである。〔金載元 (김재원 Kim Chae-won) '尹武炳 (윤무병 Yun Mu-byong) '韓國支石墓研究』(한국지석묘연구 Han'guk chisong-myō yon gu)' 國立博物館調査報告 (국립박물관조사보고 Kungrip pangmulgwan chosa pogo) 서울 (Seoul)' 국립중앙박물관 (Kungnip chungang pangmulgwan)' 一九六七年〕。
- (35) 東京大学博物館カタログ。
- (36) 関野貞、『韓国建築調査報告』、東京帝国大学、一九〇四年。
- (37) 「甲乙丙丁」は、アルファベットの「a, b, c, d」に対応し、上位からのランクを表す。
- (38) 昌慶宮は、主要な四つの宮殿のひとつで、李王家の住居であった。
- (39) 総督府博物館は、他の研究機関と同様に、現地の朝鮮の人々を雇用しなかった。植民地行政機関や教育機関などでも、高位の役職では、雇用差別政策がとられ、それが朝鮮エリートたちの憤慨の原因にもなった。
- (40) 現在の国立博物館の建物は、かつて朝鮮総督府の本部として使用されていた。一九八六年、博物館は景福宮殿から、朝鮮の人々が植民地時代の日本にとってもっとも重要な建物と考えていた場所へと移築された。一九八八年のソウル・オリンピックを控えてのことであった。移転に関しては、利点と損失とをめぐって、専門家やジャーナリストの間で、数年に亘る論議がなされた。新たな博物館を建設するほうが、この古い大理石建造物(一九二六年、日本の技師

- たちは、十年を要してこの建造物を完成させ、当然のこのように、この建物を王宮前に設置した)を破壊するよりも費用が少なくてすむという見積りが出されたとき、すでにオリンピックの予算も緊縮せねばならない段階にあり、支出を減じる功利主義的な議論が、国民主義的な反対を押し切って優先されることになった。一九九三年、反日抗議と論議を経て、最終的に、朝鮮総督府は「破壊」されることになった。そうすることで、「景福宮は、原初の形態を取り戻し、朝鮮民族の精神を甦らせることになる」ということであった(國立中央博物館、『博物館新聞』(박물관신문 Pangmulgwan sinmun)' 二六六号、一九九三年(一〇月一日)、一頁)。
- (41) 「古蹟および遺物保存規定」、樺本杜人、『Han tombs of Lolang - their studies by Japanese scholars.』 *Memoirs of the Research Department of the Toyo Bunko* 21, 1962, pp.97-124.
- (42) 藤田亮策、「朝鮮の古蹟調査と保存の沿革」。
- (43) 西山武彦、「韓国建築調査報告」。
- (44) 「国宝」は、朝鮮では、[kukbo]と発音する。本稿では、植民地時代に日本語で書かれたままの言葉を使用している。当時、報告書は、朝鮮の言葉では書かれなかった。総督府において、その使用が禁止されていたからである。
- (45) 藤田亮策、「朝鮮の古蹟調査と保存の沿革」。
- (46) 現在、この墳墓は、広開土王(三九一—四一三)のものと考えられている。四一四年に建てられた石碑に、王が新羅と百済を制圧したことが記録されている。
- (47) 東京大学博物館カタログ。

(48) 高句麗は、南部へ勢力を拡大すべく、四二七年に、通溝から平壤に首都を移転した。

(49) これらの発掘地は、現在、中華人民共和国の吉林地方の集安市に位置している。今日もなお、考古学調査と研究が、高句麗時代を研究する中国の考古学者によって継続されている。Li Dianfu, Jì'an Gaogoulimu yanjiu, *Dongbei kaogu yu lishi*, Beijing, Wenwu, 1982. 及び 최무장 (Choe Mu-jang) 『高句麗渤海文化』(고구려발해문화 Koguryo, Pahlae munhwa) 『서울』(Seoul) 『한민족』(Chib-mundang) 一九八二年。

(50) 南滿洲鉄道株式会社は、中国と朝鮮における商業開発と領土拡大の先導者であった。植民地時代を通じて、強大な影響力をもったこの会社に関しては、あらゆる角度から研究がなされている (John Yong, *The Research Activities of the South Manchurian Railway Company, 1907-1945—a history and bibliography*, New York, East Asian Institute, Columbia University, 1966.)。当時、本社には、調査部門 (満鉄調査部) が設置されており、当代随一の学者たちが、満洲と朝鮮における地質学、地理学、農学、経済学、民族誌学、考古学、歴史学の研究に取り組んだ。本稿で言及した考古学者や歴史家のなかにも、この調査部門に属していたものが多数いる (原覚天 『満鉄調査部の歴史とマニマ研究』、『マニマ経済』、二〇一—二四、一九七六—八三年。及び、原 『満鉄調査部とマニマ』、『勤草書房』、一九八六年。伊藤武雄 『満鉄に生きて』—英語訳 translated by Joshua A. Fogel, *Life along the South Manchurian Railway—the memoirs of Ito Takeo*, Armonk, New York, M.E.

Sharpe, 1988.)。南滿洲鉄道株式会社は、『満洲歴史地理』、『満洲地理歴史研究報告』(東京大学、一九一五—一九四一年)などの出版物において、考古学、歴史上の発見を発表している。

(51) 藤田亮策、『朝鮮考古学研究』、京都、高桐書院、一九四八年、四九八頁。

(52) 朝鮮総督府、『染浪郡時代の遺跡、古蹟調査特別報告』、四卷、東京、一九二七年。朝鮮総督府は、一九〇五年から一九四五年にかけて存在していた。

(53) 前掲書。

(54) 駒井和愛、『染浪郡治址』、『考古学研究』、東京大学考古学研究室、一九六五年。

(55) Hyung II Pai (백영환 裴炯逸)、『The Lelang interaction sphere in Korean prehistory』, PhD diss., Harvard University, 1989.

(56) 尹乃鉉 (윤내현 Yun Nae-hyon)、『韓國古代史新論』(한국고대사신론 Han'guk kodaesa sillon) 『서울』(Seoul) 『한민족』(Chib-mundang) 一九八六年。

(57) 洪起文 (홍기문 Hong Ki-mun)、『朝鮮의考古學에 대한日帝御用學說의檢討』(조선의 고고학의 대일제이용학설의 검토 Choson ui kogohak ui tae ilche oyonghaksol ui komto)、『歷史問題』(역사문제 Yuksa munje) 一三三—一四号、一九四九年、五三一—一〇二頁。

(58) 前掲書。

(59) 前掲書、九五頁。

(60) 前掲書。

(61) 金元龍 (김원룡 Kim Wol-Iyong) '「漢渡文化의 歴史的 位置」 (한도문화의 역사적 위치 Nangnang munhwa ui yoksaiook wichi)' 『韓國文化의 起源』 (한국의 문화의 기원 Han'guk munhwa ui kiwon)' 第二版 (Seoul)' 탐구당 (T'amgudang)' 一九八三年' 及び、裴炯逸 (배형익 Pai Hyung Ik) "Culture contact and culture change : the Korean peninsula and its relations with the Han dynasty commandery of Lelang," *World archaeology*, 23, 3, 1992, pp.306-19.

(62) W. G. Aston, *Nihongi*, 1896, reprinted, Tokyo, Charles E. Tuttle, 1972. 伽耶の美術品に関する大きな展覧会が、ソウル国立博物館と東京国立博物館、および朝日新聞社の共催で一九九二年に開催された。展覧会は、東京国立博物館のあと、京都国立博物館、福岡県立美術館を巡回した(東京国立博物館、「伽耶文化展」、朝日新聞社、一九九二年)。展覧会はひとつの画期をなした。というのは、初めて、韓国と日本の研究者が協力して、朝鮮と日本の古墳遺物を一堂に集めたからである。展示品には、朝鮮半島と日本列島から発掘された青銅器や鉄器、武器、鏡、金冠、馬具、須恵器が並んだ。この百年間、初期王陵遺物の地理上の起源をめぐって、「騎馬民族」に関する議論が盛んになされてきた。この民族が朝鮮を経由して、日本に至ったと考えられたからである (Gari Ledyard, "Galoping along with the horse riders : looking for the founders of Japan," *Journal of Japanese Studies* 1.2, 1975, pp.217-54)。日本において「副葬品の議論」は、現在でも盛んである。日本の国家と天

皇の正統性の「神聖なる」起源の理解に関して、決定的な議論とならなければならない (Walter Edwards, "Buried discourse : the Toro archaeological site and Japanese national identity in the early post-war period," *Journal of Japanese Studies* 17.1, 1991, pp.1-23)。古墳と副葬品は、それゆえ、日本人の「神話・宗教」的起源の年代を決定する物質的証拠とみなされる運命にある。その結果、古墳を含む遺跡は、国民の誇りと遺産を示す場所として重要視され、*remembering* : toward a historical ethnography of the nation state," *Cultural nationalism in East Asia*, ed. H. Befu, Institute of East Asian Studies, Berkeley, University of California Press, 1993)。共通の考古学的遺物とともに展示した日本と韓国の共同による展覧会は、学術的な議論に関して新たな扉を開ける最初の一步となると、私は確信している。今日、歴史家や考古学者は、「敵対する国民史」を含意した政策や、考古学的、美術的、文化的生産物の「正統性」の要求に関して、寛容な態度を求められている。

(63) 朝鮮総督府、朝鮮総督府朝鮮史編集会、『朝鮮史編集事業概要』、京城、朝鮮史印刷、一九三八年。

(64) 関野貞、『朝鮮美術史』、朝鮮学会編、京城、近澤書店、一九三二年。

(65) 朝鮮総督府、『古蹟調査報告』、京城、一九二七—一九四〇年。

(66) 英訳は著者自身による。

(67) 一九四五年に朝鮮国立博物館の館長、金載元博士は、その自伝において、植民地時代の朝鮮考古学者である有光教一が、日本降伏

後も、ソウルに留まり、これらの貴重な美術品の保護を行っていたと書いている。金載元 (김재원 Kim Chae-won)、『博物館斗한平生』(박물관과 한평생 Pangmulgywan kwa hanpyongsae) 서울 (Seoul) 탐구당 (T'angudang) 一九九二年。博物館のコレクションが、金博士の管理下に受け渡された時、アメリカ合衆国占領軍の代表もソウルに駐在して、その様子を監視した。さらに、彼は、この出来事によって、有光との生涯に亘っての友情の絆が築かれたとも記している (九七頁)。

(68) 前掲書、九六頁。

(69) 旗田巍、『朝鮮史入門』、『日本人の朝鮮観』、『新朝鮮史入門』(東京、竜溪書舎、一九八一年)。

(70) 朝鮮総督府、『朝鮮人』、京城、朝鮮印刷、一九二〇年。および、『朝鮮人の思想と性格』、京城、調査資料第二集、一九二七年。

(71) 朝鮮総督府、『朝鮮人の思想と性格』。

(72) 前掲書、七一頁。

(73) 前掲書、五八頁。

(74) 前掲書、五七頁。

(75) 前掲書、七〇頁。

(76) 前掲書。

(77) これは当時にあつては極めて標準的な論理であり、これによって植民地支配と文化的抑圧が正当化された。一九世紀から二〇世紀初頭にかけて、イギリスやフランス、ドイツなどの帝国主義国家にいた知識人や人類学者、あるいは考古学者たちは、この論理を擁護した。とりわけ、この種の議論は、アフリカやラテン・アメリカ、

あるいは中東における「植民地考古学」学派の発展にとって重要であった (Bruce Trigger, *A history of archaeological thought*, Cambridge, New York, Cambridge University Press, 1989.)。近年になってようやく、この時期に活躍した学者たちに関して、組織的な再評価と批判が行われるようになり、意識的であれ、無意識にであれ、植民地政策と関わりをもったそのフィールドワークの方法論や態度、動機などが検討されてくる (George W. Stocking, ed., *Colonial situations: essays on the contextualization of ethnographic knowledge*, Madison Wis.: University of Wisconsin Press, 1991.)。

(78) 旗田巍、『日本と朝鮮』(シンポジウム)、『勁草書房』一九六九年、一三頁。

(79) 朝鮮総督府、『朝鮮人の思想と性格』、七一頁。

(80) 一九八〇年代初頭、それまで大学の議論に限定されていたこうした歴史をめぐる問題が、マスコミの関心を引くようになった。韓国、中国、台湾、そしてアメリカ合衆国のチャイナタウンで、大々的なデモが行われたからである。デモ隊が非難したのは、日本の教科書において、日本軍の征服活動や戦争、朝鮮や中国への残虐な行為を記述する際、歴史的事実として正確な「侵略」という用語の代わりに、婉曲的な「進出」という用語が使用されているということであった (Kenneth B. Pyle, "Japan besieged: the textbook controversy," *Journal of Japanese Studies* 9.2, 1983, pp.298-300, at 298)。

(81) 本稿では、「Nippon」ではなく、「Japanese」という単語を使用した。「Nippon」という言葉が、植民地時代の学者たちによって

千五百年以上も前の「倭」の活動を記述する際に、使用されたからである(小田省吾、『朝鮮史大系 古代編』、朝鮮史学会、京城、近澤書店、一九二七年)。今日のような統一的な「Japanese」国家は、一九世紀の明治時代に形成されたものであることが十分に明らかとなった現在、私には、「Nippon」というフルフマハットの表記は、時代錯誤的なもののように思える(Carol Gluck, *Japan's modern myths*, Princeton, N. J., Princeton University Press, 1985.)。今日、多くの日本人学者は、しかし、少数の例外(網野善彦)を除いて、「Nihon」という表記を使用しつづけている。おそらく、破綻なく続く帝国の正統性を信じてのことであろう(Fujitani Takashi, *op. cit.*)。これによって、七世紀頃成立した『日本書紀』と『古事記』に言及された古代神話に溯る民族の連続性が象徴されるのである。

(82) 朝鮮における発音は「Imna」であり、この問題をめぐっては、日本と朝鮮の古代史研究者の間で、最も重要な論議がなされている。数十年に亘って、日本の学者(小田省吾、『朝鮮史大系』、および、佐伯有清、『広開土王碑』、東京、吉川弘文館、一九七九年)は、大和國家による古代日本のコロニーは、三六五年から五六一年(『日本書紀』による)にかけて、朝鮮半島の南東部に及んでいたと主張している。そこから、日本の軍隊が、百済と新羅を攻撃したのだと考えるのである。この解釈を支える碑文は、高句麗の広開土王碑の拓本である。この石碑(四一四年)の拓本は、一八八三年に日本の軍隊によって持ち帰られたものであった。石碑自体は、中国の吉林地方の通溝にあり、鳥居龍蔵や関野貞、黒板勝美、池内宏など主要な学者によって細部に亘って研究されている。しかしながら、今日、

この碑文の内容と不十分ながらも歴史を伝える内容の解釈は、千寛宇や金貞培など、著名な朝鮮の歴史家たちに疑問視されている。彼らは、日本人による翻訳の正確さと解釈を否定し、さらには、紀元前一五〇〇年における征服を正当化しようと、石碑自体を日本の学者が捏造したのだという非難までしている。金貞培(김정배 Kim Chong-bae)『韓國古代史論의 新潮流』(한국고대사론의신조류 Han'guk kodaesaron ui sinjoryu)『서애』(Seoul)『근대사학개론』(Koryo taehakkyo) 一九八〇年、及び、千寛宇(천완우 Chion Kwan-u)『A new interpretation of Mimana,』parts 1 and 2, Korea Journal 14, Feb. 1974, pp.9-23, April 1974, pp.31-44. 百年以上の研究にも拘らず、この議論はいまだ解決をみていない(H.C. Chon, 『古代にみえる朝鮮観』、東京、朝鮮青年社、一九八一年)。

- (83) 旗田巍『日本人の朝鮮観』、『新朝鮮史入門』。
- (84) Yksa Hakhoe, *Reflections on Korean history*, pp.8-9.
- (85) 김홍섭 (Kim Hong-sop) 『미제국주의사실과 의한 남조선선양회양말의 유래와 파궤』(Mijeguk chuujadul e uhan Namchoson munhwa yumul ui ryakt'al kwa p'agoe) 『근대민속』 三、一九六五年、一一—一九頁。
- (86) 李佑成(이우성 Yi U-song)・姜萬吉(장만길 Kang Man-gil) 編『韓國의 歴史認識』(한국역사의인식 Han'guk ui yksa insik) 『서애』(Seoul) 創作과 批評(창작과 비평 Ch'angjak kwa pip'yong) 一九七六年。
- (87) Reischauer, "Japanese archaeological work."
- (88) Benedict Anderson, *Imagined communities: reflections on the*

origin and spread of nationalism, rev. ed., London and New York: Verso, 1991.

(89) 関野貞、前掲書。関野は、仏国寺と石窟庵を朝鮮芸術の頂点に位置づけている。おそらく、関野の新羅に対する並々ならぬ関心は、「否定的証拠」によって運命づけられるものでもあった。すなわち、朝鮮半島では、新羅時代以外の文化的遺物は、それほど保存されてはいなかったのである。新羅の仏教遺物は、例えば慶州郊外の南山の奥深い斜面に彫られており、何世紀にも亘って、戦争や破壊行為の被害を免れることができたのである。それゆえ、他の王朝に比べて、新羅の芸術や建築は、考古学的記録に多く残る結果となったのである。

(90) 関野貞、『朝鮮美術史』、一〇頁。

(91) 注(90)前掲書、二〇頁。

(92) 注(90)前掲書、二頁。

(93) 藤田亮策、『朝鮮綜鑑』、『朝鮮考古学研究』、『朝鮮学論考』。

(94) 藤田亮策、『朝鮮考古学研究』。

(95) 先史時代の「金石併用期」という用語は、朝鮮と日本の考古学において、もうひとつ別の議論でも問題となっている。朝鮮の考古学者が非難するところによると、日本の学者は、朝鮮半島に完全な青銅器時代の存在があったことを無視しているという。この無視によって、日本に「真の意味での」青銅器時代がないことを正当化しようとしているというのである。第二次世界大戦後の朝鮮考古学は、日本の弥生時代(紀元前三世紀頃)に先行する時期に朝鮮半島で青銅器時代があったことを証明するのに躍起になってきたといっても

過言ではないだろう。最近の朝鮮考古学の書誌を少し見れば、ほとんどの調査研究が、青銅器時代に捧げられていることがわかるであろう。ドルメンの研究(M. N. Choe, *A study of the Yongson river valley culture*, Seoul, Dong Songsa, 1984.)にしても、朝鮮の刀剣の分類研究(尹武炳(윤무병) Yun Mu-byong)、『韓國青銅器文化研究』(한국의 청동기 문화 연구 Hanguk ch'ongdonggi munhwa yongu) / 서울(Seoul) / 예경사점판사(Yegyong sanopsa) / 一九八七年) / さらには、稲作農業の証拠を求める発掘もそうである。これらの課題は、紀元前一〇〇〇年から七〇〇年頃の青銅器時代に最初の「朝鮮民族」が到来した考古学的証拠となりうるので、これからも追求されつつけることであろう。

(96) 藤田亮策、『朝鮮考古学研究』、五頁。朝鮮半島において初めて新石器時代の遺物を発見したとき、鳥居龍蔵もまた次のように解説していた。「これらの道具は、日本の道具と同じようにみえる」(『鳥居龍蔵全集』)。おそらく、この研究が、朝鮮考古学を、日本の

先史学に組み込もうとする初期の学究的試みであった。

(97) 斎藤忠、『鳥居龍蔵集』。

(98) 注(97)前掲書、六頁。

(99) 藤田亮策、『朝鮮考古学研究』、二六一―二七頁。

(100) 注(99)前掲書、一六頁。

(101) 注(99)前掲書、二六頁。

(102) 注(99)前掲書、二〇―二二頁。

(103) 注(99)前掲書、三〇頁。

(104) 注(99)前掲書。

(105) 注(99) 前掲書、四〇―四二頁。

(106) 注(99) 前掲書、四一頁。

(107) 注(99) 前掲書、一頁。

(108) 注(99) 前掲書、二頁。

(109) 旗田巍は、紛れもなく、第二次世界大戦後の日本史編纂に最も貢献した歴史家であり、朝鮮の「修正主義」史観を表明した(旗田『朝鮮史入門』、『日本人の朝鮮観』、『日本と朝鮮』(シンポジウム)、『新朝鮮史入門』)。彼は、体系的に、朝鮮と朝鮮民族に関して歪められた歴史を数十年に亘って広めつづけた日本の歴史編纂と学術活動を研究し、その植民地主義的かつ帝国主義的な起源を暴露している。彼や朝鮮の歴史家たちは、中高生向けの歴史教科書が、旧態依然として、「朝鮮人」の否定的かつ軽蔑的なイメージを植え付けて、今日の日本社会における朝鮮への差別観を補強していると考えている。金項勾(김항구 Kim Hang-gu)『國史教科書』『日本關係内容分析』(국사교과서의 일본관계내용분석 Kukka Kyogwaso ni Ihon kwan'gye naeyong pumsok)『高句麗史研究史料』三二一―一九八二年、二九―五三頁。

(110) 本稿では、この用語を、朝鮮半島と日本列島という純粹に地理的な配置に従って使用しているということを強調しておきたい。近代的な意味で、「日本」も、「朝鮮」も、明確な区別をもって存在してはいなかった古代においては、国家の区別、民族の区別、あるいは文化や文明の区別もなかったと考えるからである。明確に、初期の「朝鮮」文明が登場するのは、六六八年の統一新羅時代まで待たねばならない。このとき、新羅が百済と高句麗を征服し、朝鮮半島

全体を支配したのである。

(111) 「影響」は、稲作農業、鑄造、書法、鍵穴型墳墓、須惠器、武器など、文明の主要な特徴全てに及んでみられる。百済と日本の奈良朝とのあいだで取り交わされた外交、文化交流、宗教的接触に関して信頼できる史料は、三国時代後期(四―七世紀)のものとなっている。それに先立つ時代には、古墳の副葬品となった年記の不確かな考古学的遺物しか存在しない。『日本書紀』には、海を渡って、武器や宝石、鏡などの皇帝の宝物とともに到着した新羅の王子の物語があるが、歴史的典拠としては、年代的な問題があまりにも多すぎる。しかしながら、当時、朝鮮半島と日本列島との間で交わされていた外交や思想上の交流を暗示する神話、ないし伝説を伝える魅力的な挿話としては、文学的な価値を保持している。発掘された数少ない同時代の銘文も、解読されておらず、十分な結論を引出すには至っていない(村山七郎 Murayama Shichiro and Roy Andrew Miller, "Inariyama tumulus sword inscription," *Journal of Japanese Studies* 5:2, 1979, pp.405-38.)

(112) 金貞培(Kim Chong-bae)『"Ethnic Korean nation"; idem, *New trends; idem, Ancient state in Korea.* 及び 尹乃鉉(Yun Nae-hyon)『韓國古代史新論』一九八六年。

(113) 朝鮮半島との関係で、箕子への言及がはじめてなされるのは、二世紀の中国の書籍においてである(今西龍『古代朝鮮史』一三二―一三三頁) および Burton Watson, *Records of the grand historian of China*, New York and London, Columbia University Press, 1968)。そこでは、王朝の衰退期に東に逃れ、王(紀元前一

〇〇〇年頃)から、封土を与えられた貴族の物語が語られている。しかし、この記録を裏付ける後秦時代の遺物——青銅器、陶器、武器——は、全く発見されていない。

(114) 衛満は、紀元前一九五—一九四年の攻撃失敗の後に、朝鮮に落ち延びた燕の一般的な名と関連を持っている。崔夢龍の解釈によれば、この出来事は、朝鮮半島におけるはじめての「征服—国家の登場を意味している(崔夢龍(최몽룡) Choe Mong-nyong)『영산강(Yong-san river valley culture)』서양(Seoul)』『동양(Doongsongsa), 1984.)。一方、李基白教授によれば、衛満の出身が中国であるかどうか疑わしく、おそらくは、地方士族の指導者で、権威を得るために、中国人を名乗ったのだらうという(一九八〇年、個人的な談話による。及び、李基白(이기백) Yi Ki-baek)、『李基東(이기동) Yi Ki-dong)』『韓國史講座』『古代編』(한구사상학회)『고대사』Han'guksa kangjiwa, I, kodaesa p'yon)』『서양(Seoul)』『일조각(Iichogak)』一九八三年)。彼の解釈は、衛満の朝鮮が古代中国のコロニーであったことを否定しようとする民族主義的歴史学派の考え方を代表するものである。

戦国時代後期の武器や「明刀銭」など、考古学的に燕の遺物であることを示すものは、主に、半島全土から出土している。完全な年記や副葬記録が残っているわけではないので、これらの遺物が、現実には征伐があった証拠となっていないわけではない。

(115) 「侵略ノイローゼ」の定義は私の独創ではなく、グラハム・クラークの古典的な論文があることを想起して頂きたい。クラークは、イギリスの先史に関して方法的な解釈格子が欠如していることを

嘆いた。イギリス考古学の方向性を変えた革新的な著作において、彼は、イギリスの古代遺跡の起源を全てヨーロッパ大陸に求めるイギリス考古学者が「侵略ノイローゼ」に冒されていると診断した(Grahame Clark, "The invasion hypothesis in British archaeology," *Antiquity* 40, 1966, pp.179-9, at 172.)。この病状は、今日の朝鮮と日本において依然として存在し、私の考えによれば、両国の学者たちは、いまだに、過去百年の政治的併合と植民地支配、文化的抑圧、そして朝鮮戦争後の南北分断が残したトラウマと傷痕に喘いでいる。彼らは、二千年前の遠い過去をも、一九世紀から二〇世紀にかけて有効であった「帝国主義的」かつ「植民地主義的」な解釈格子や方法論、用語法によって理解しようとしているのである。

(116) 尹武炳、『韓國青銅器文化研究』、藝耕産業社、一九八七年

(117) Ledyard, "Horseliders,"

(118) 金秉模(김병모) Kim Pyong-mo)、『韓國巨石文化源流의研究』(한구사상학회)『한구 Han'guk kosok munhwa wollyu ii yongu)』『한구학보(韓國學報)』一〇一一、一九八一年、五五—七八頁。

(119) かつてソウル国立大学教授であった金元龍は、近代朝鮮考古学の父と呼ばれている。一九七三年の出版以来、版を重ねている『韓國考古學概説』(一九八六年、第三版)が彼の最大の貢献である。

彼はまた、一九七三年の創刊以来、過去と現在を問わず朝鮮考古学における主要な発見を総括してきた『韓國考古學年報』(ソウル大学考古学・人類学部、一九七四—九二年)の編集主任でもある。

(120) 李基白教授は、一九七六年初版の『韓國史新論』で知られてい

る。ハーバード大学のワグナー教授によって、一九八四年にハーバード大学出版(第二版は韓国で)の英語訳も出版されている。本書は、現在でも最も影響力があり、広範に歴史史料を読解し、著者のいう「新しい枠組み」によって朝鮮史を説明している。この意味で「新なる」とは、植民地時代の日本人による朝鮮の過去の読解と対立をせつめることはいままでもない。李基白はまた、朝鮮戦争後の朝鮮の歴史編纂問題についても著作を残している(李基白 Yi Ki-baek, 『民族の歴史』, idem, *A new history of Korea*, tras. Edward W. Wagner with Edward Shultz, Cambridge, Harvard University Press, 1984)。

(17) 姜萬吉 (姜萬吉 Kang Man-gil) 編『分斷時代の歴史認識』(분단시대의 역사인식 Pundan sidae ui yoksa insik) (서울) 서울대학교출판부 (Ch'angjak kwa pip'yong)。

(18) Stephen Shennan, *Archaeological approaches to cultural identity, One World Archaeology*, no.10, London and Boston, Unwin Hyman, 1989.

(19) Peter Gathercole and David Lowenthal, eds, *Politics of the past, One World Archaeology*, no.12, London and Boston, Unwin Hyman, 1990.

(20) Trigger, *Archaeological thought*, p.174.

(21) *Ibid.*

(22) Hugh A. MacDougall, *Racial myth in English history : Trojans, Teutons, and Anglo-Saxons*, Hanover, N. H., University Press of New England, 1982.

(23) Bernard Lewis, *History remembered, recovered, invented*, Princeton, N.J.: Princeton University Press, 1975.

(24) 裴炯逸 (裴炯逸 Hyung Il Pai), "Culture contact and culture change."

(付表)

日本の考古学的調査年表／朝鮮半島における保護活動(一九〇〇—一九四五)

編集／広瀬繁明(木曜クラブ)・吉井秀夫(京都大学考古学科)

- 一九〇〇年 八木英三郎による朝鮮半島の調査(一九〇一年も)。
- 一九〇二年 関野貞による最初の美術工芸・建築一般調査(京城・開城・釜山・大邱・伽耶山・慶州で寺院・廟・宮城・墳墓などを調査)。
- 一九〇五年 満洲・輯安で鳥居龍蔵が高句麗の城址を最初に発見、広開土王(好太王)碑を踏査。
- 一九〇六年 今西龍による慶州古墳の初調査。
- 一九〇七年 今西龍による金海貝塚の発見。
- 一九〇八年 昌慶宮内に李王家博物館と動植物園を設置。
- 一九〇九年 古蹟保存を目的とした関野貞・谷井濟一・栗山俊一による朝鮮全域の初の組織的調査(美術工芸・建築・墳墓などの等級付けと時代区分の開始)。
- 一九一〇年 韓国併合(現在の韓国におけるすべての考古学的、歴史的調査、あるいは出版事業は、当時の朝鮮総督府の指導による)。
- 朝鮮の教科書執筆のために朝鮮文献史料の収集を開始(一九一〇—一九一六、小田省吾の指導)。
- 朝鮮の金石文と歴史資料の収集のため、鳥居龍蔵(一九一一)・今西龍(一九一一)・黒板勝美(一九一五)を派遣。
- 一九一一年 鳥居龍蔵が朝鮮全域にわたり考古学的、歴史的資料を調査(先史遺物と遺跡を初めて発見する)。
- 黄海道沙里院で漢時代帯方郡治の唐土城と「帯方太守張撫夷」銘磚を発見。
- 朝鮮寺刹令を發布(寺院・庵を統治する最初の保護法令)。これは朝鮮総督府の寺刹調査史料(寺院関係記録史料)調査に基づく。
- 一九一二年 肝城里で高句麗の裝飾古墳(蓮華塚)を調査。
- 最初の組織的高句麗時代の発掘調査開始(江西三墓里で壁画古墳を発見)。
- 石窟庵の修復事業開始(以後一六年間)。
- 一九一三年 輯安で高句麗古墳の調査(関野・谷井・栗山・今西)。

平安南道で楽浪土城と禾占蟬泉銘の石碑を確認。

一九一五年 景福宮内に朝鮮総督府博物館を設置。

百濟陵山里古墳群の調査（関野・黒板）。

一九一六年 古蹟調査委員会を設置（考古学的、歴史的調査・収集・古蹟登録・発掘調査を監督）。

古蹟及遺物保存規則を公布（最初の包括的保護法令）。

関野貞らによる楽浪古墳の発掘。

慶州で皇龍寺址・四天王寺、全羅南道で松広寺の測量調査（黒板）。

一九一七年 百濟の陵山里王陵を調査（谷井）。

過去の王都の遺跡・廟・古墳墓・宮城・城址・寺院管理の保護規則。

羅州潘南面古墳群の調査（谷井）。

咸安（今西）・高霊・金海（黒板）で任那（伽耶）の墳墓を発掘。

一九一八年 慶州で新羅の墳墓発掘開始（積石木槨墳Ⅱ黒板・原田）。

星州・高霊・昌寧で任那（伽耶）の墳墓を発掘（谷井・濱田・梅原）。

仏国寺の修復事業開始（以後八年間）。

一九一九年 日本で史蹟名勝天然紀念物保存法を公布。

一九二〇年 慶尚南道梁山で夫婦塚を発掘（馬場・小川）。

金海貝塚を発掘（濱田・梅原）。

金石併用時代を命名。

慶州入室里で青銅器群を発見。

一九二一年 慶州で金冠塚を発掘（濱田・梅原）。

朝鮮総督府に古蹟調査課を設置（一九二四年廃止）。

一九二三年 日本で関東大震災おこる（以後、総督府は緊縮財政政策となる）。

一九二四年 慶州で金鈴塚・飾履塚を発掘（小泉・沢）。

楽浪石巖里古墳五基発掘（藤田・小場）、「楽浪ブーム」おこる。

一九二六年 慶州で瑞鳳塚を発掘（藤田・小泉・沢）。

朝鮮総督府博物館慶州分館（諸鹿央雄）設置。

一九三一年 楽浪彩篋塚を発掘（小泉・沢Ⅱ平壤研究所）。

朝鮮古蹟調査研究会設置。

一九三二年 百濟博物館（大坂金太郎）開設。

一九三三年 朝鮮宝物古蹟名勝天然紀念物保存会令を公布。

公州宋山里で百濟墳墓を発掘（軽部慈恩）。

一九三四年 金海で遺跡発掘、石棺墓・墓壙と金海式土器の命名につながる甕棺墓を調査（榎本）。

平壤府立博物館（小泉頭夫）開設。

一九三九年 全羅南道羅州潘南面で甕棺墓を発掘（有光・沢）。

朝鮮総督府博物館扶餘分館開設。

一九四〇年 輯安で高句麗時代の舞踏塚を発掘。

一九四三年 朝鮮総督府の最終登録総数は五九一件（宝物三四〇件、

古蹟一〇二件、古蹟及名勝三件、名勝一件、天然記念物一四六件）。